大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第68集

香紫庵遺跡
挾万田遺跡

－国道212号（中津三光道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(2)－

2013

大分県教育庁埋蔵文化財センター

序　文

本書は、国道２１２号（中津三光道路）道路改良工事に伴い大分県教育委員会が大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて実施した香紫庵遺跡と挟万田遺跡の発掘調査報告書です。

香紫庵遺跡と挟万田遺跡はともに中津市三光に所在する遺跡で、香紫庵遺跡からは縄文時代の土坑や古代の掘立柱建物等、挟万田遺跡からは古代の溝や掘立柱建物が確認されました。付近に所在する中津市立秣小学校では古代寺院である塔ノ熊廃寺が見つかっており、今回両遺跡で発見された建物跡等の遺構は、出土遺物の年代からこの塔ノ熊廃寺に関連する集落であった可能性が考えられます。塔ノ熊廃寺と関係する集落はこれまで発見されておらず、今後、古代寺院と集落との関係の解明につながることが期待されます。

本書が埋蔵文化財の保護・啓発とともに、学術研究の一助として活用していただければ幸いです。

最後になりますが、発掘調査の実施にあたり多大な御支援・御協力をいただいた関係各位に対し、衷心から感謝申し上げます。

平成25年３月29日

大分県教育庁埋蔵文化財センター

所長　山口博文

例　言

1．本書は大分県中津市三光西秣字楢本に所在する香紫庵遺跡、同三光下秣字挾万田に所在する挾万田遺跡の発掘調査報告書である。

2．発掘調査は国道212号（中津三光道路）道路改良工事の実施に伴い、大分県土木建築部中津土木事務所の依頼を受けて大分県教育庁埋蔵文化財センターが実施した。

3．発掘調査は平成24年1月6日～2月3日にかけて並行して実施し、埋蔵文化財センター大型事業班主任　横澤　慈が担当した。

4．発掘調査に際し調査の支援業務委託を実施した。現地での写真撮影や遺構実測等の記録作成作業は受託者である株式会社九州文化財総合研究所（調査技師　畔津宏幸、調査助手　服部真和）が行った。

5．遺物洗浄、注記、接合、実測、トレース等報告書作成に伴う整理作業は株式会社九州文化財総合研究所に委託した。遺物写真の撮影は江田 豊（埋蔵文化財センター大型事業班課長補佐）が行った。

6．出土遺物及び写真・実測図等の調査記録は大分県教育庁埋蔵文化財センター（大分市大字中判田字ビワノ門1977番地）で保管している。

7．本書で使用する方位は座標北で、座標値は世界測地系の数値である。

8．本書で使用する遺構略号は下記のとおりである。
SB（掘立柱建物）、SD（溝）、SK（土坑）、SP（ピット）

9．本書の執筆・編集は横澤が行い、全体を後藤一重（埋蔵文化財センター大型事業班参事）が総括した。

目　次

序　文
例　言

第１章　調査の経過
　第１節　調査に至る経過 …… 1
　第２節　発掘調査の方法と本調査の経過 …… 1
　第３節　整理作業・報告書作成の経過 …… 2
　第４節　調査組織の構成 …… 2

第２章　遺跡の立地と環境
　第１節　地理的環境 …… 3
　第２節　歴史的環境 …… 3

第３章　香葉處遺跡の調査
　第１節　調査区の設定 …… 5
　第２節　調査区の基本層序 …… 7
　第３節　調査の成果 …… 7
　第４節　小結 …… 18
　遺物観察表 …… 18

第４章　挟万田遺跡の調査
　第１節　調査区の設定 …… 20
　第２節　調査区の基本層序 …… 20
　第３節　調査の成果 …… 25
　第４節　小結 …… 29
　遺物観察表 …… 30

第５章　総括 …… 30

写真図版
報告書抄録

挿図目次

第１図　三光地域の遺跡分布図 …… 4
第２図　香紫庵遺跡位置図 …… 5
第３図　香紫庵遺跡土層断面図 …… 6
第４図　香紫庵遺跡遺構配置図 …… 7
第５図　SK030実測図 …… 9
第６図　SK030出土遺物実測図 …… 9
第７図　SK001実測図 …… 10
第８図　SK001出土遺物実測図 (1) …… 11
第９図　SK001出土遺物実測図 (2) …… 12
第10図　SK001出土遺物実測図 (3) …… 13
第11図　掘立柱建物SB001実測図 …… 14
第12図　掘立柱建物SB001出土遺物実測図 …… 14
第13図　その他の遺構実測図 …… 15
第14図　その他の遺構出土遺物実測図 …… 16
第15図　調査区出土遺物実測図 (1) …… 16
第16図　調査区出土遺物実測図 (2) …… 17
第17図　挟万田遺跡位置図 …… 20
第18図　挟万田遺跡土層断面図 …… 21
第19図　挟万田遺跡遺構配置図 …… 22
第20図　掘立柱建物SB001実測図 …… 24
第21図　溝状遺構SD001実測図 …… 25
第22図　SD001出土遺物実測図 …… 26
第23図　その他の遺構実測図 …… 27
第24図　調査区出土遺物実測図 …… 28
第25図　圃場整備前の地形と挟万田遺跡 …… 29

表目次

第１表　香紫庵遺跡遺構一覧表 …… 8
第２表　香紫庵遺跡遺物観察表 …… 18
第３表　挟万田遺跡遺構一覧表 …… 23
第４表　挟万田遺跡遺物観察表 …… 30

図版目次

図版１　香紫庵遺跡から挟万田遺跡を望む
　　香紫庵遺跡調査区全景写真
図版２　調査区北半部遺構群（SK001・掘立柱建物SB1）
　　SK001遺物出土状況、掘立柱建物SB001
図版３　SB001柱穴（SP035）、SB001柱穴（SP040）、縄文時代の土坑SK030、SK030縄文土器出土状況、
　　土坑SK036、土坑SK047・SK050、E2グリッド石鏃出土状況、調査区土層断面
図版４　香紫庵遺跡出土遺物
図版５　香紫庵遺跡出土遺物
図版６　挟万田遺跡から香紫庵遺跡・八面山を望む、
　　挟万田遺跡　調査区全景写真
図版７　掘立柱建物SB001、溝状遺構SD001、SD001土師器椀出土状況、SD001黒色土器出土状況、
　　SD001土師器坏出土状況、土坑SK065、SP030遺物出土状況、調査区土層断面
図版８　挟万田遺跡出土遺物

第１章　調査の経過

第１節　調査に至る経過

調査の原因となった中津三光道路は、中津市と日田市を結ぶ地域高規格道路中津日田道路の一部で、国道10号と合流する伊藤田インターチェンジと、東九州自動車道に接続する中津三光インターチェンジの間の全長3.04kmの区間である。中津日田道路は県北部と日田地域の中心都市である両市を結ぶことで生活・産業・観光面から地域づくりを支援し、九州横断自動車道や東九州自動車道と連結し福岡市や北九州市との循環型ネットワークの構築を目指す大分県の重点事業である。中津日田道路では平成20年度に中津道路の定留～伊藤田間2.14km、平成23年度末に本耶馬渓耶馬渓道路の本耶馬渓～耶馬渓山移間５kmが部分供用を開始しており、中津三光道路は平成26年度供用の予定で事業が進められている。

当該区間内では、平成16年度に穂屋遺跡、平成20年度に伊藤田窯跡群（コンゲ窯跡・穂屋１号窯跡・穂屋２号窯跡）の本調査を実施し、平成21年度にこれらの発掘調査報告書を刊行した。平成21年度からは事業対象が三光地区に入り、平成23年度にかけて用地取得状況に応じて順次試掘・確認調査を実施した。平成22年12月には香紫庵遺跡の隣接地で土坑やピット等の遺構を検出したため、周知遺跡の変更を県教育庁文化課に報告し、香紫庵遺跡の範囲拡大を行った。また、平成22年12月と平成23年11月に実施した試掘調査では、三光下秣字挾万田で多数のピットを検出したため、遺跡名を小字名から挾万田遺跡とし、県教育庁文化課へ遺跡の発見を通知し、大分県遺跡台帳への登録を行った。

以上の試掘・確認調査の結果を受けて埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関と協議した結果、年度末にさしかかる時期ではあるものの、工事工程の関係上平成23年度内に香紫庵遺跡と挾万田遺跡の本調査を実施することとなった。これを受けて平成23年12月９日には県土木建築部中津土木事務所から両遺跡の本調査依頼を受け、同日付けで調査の受諾を回答した。平成23年12月26日には文化財保護法第99条第１項に基づく発掘調査の実施を県教育庁文化課に通知した。発掘調査は平成24年１月６日から着手し、２月３日の埋め戻しで完了した。

第２節　発掘調査の方法と本調査の経過

香紫庵遺跡・挾万田遺跡の発掘調査は、大分県教育庁埋蔵文化財センターが調査主体となって実施した。調査の実施にあたり、重機の手配や作業員の雇用、労務管理等については支援業務として一括して民間調査組織に委託した。委託内容は重機による表土除去、人力による遺構検出、遺構発掘、記録写真撮影、遺構実測、空中写真撮影、現場管理、実測原図のデジタルトレース図作成等である。その一方で、調査区の設定や層序・遺構面の確認、遺構の認定、遺構埋土や調査区土層の分層等は埋蔵文化財センターの調査員が行い、遺構の性格や遺跡全体の関係を把握しながら必要に応じて受託業者の調査技師に作業の指示を与え、調査員が常駐して全体を監督しながら調査精度を確保する体制を取った。作業班の構成は受託業者の調査技師・調査助手各１名、発掘作業員１日15名を基本とした。

香紫庵遺跡の発掘調査は平成24年１月６日から表土除去を開始した。試掘調査では遺構検出面の上まで圃場整備時の盛土層が認められたため、重機で遺構検出面まで掘り下げ、人力で遺構検出作業、遺構発掘作業を行った。１月23日には空中写真撮影を実施し、遺構の記録作業後埋め戻しを行い、調査前の旧状に復した。

挾万田遺跡の発掘調査は香紫庵遺跡の調査と並行して行い、平成24年１月10日から表土除去を開始した。こちらも香紫庵遺跡と同様遺構検出面上までを重機で取り除き、遺構検出作業および遺構発掘作業を人力で行った。１月27日に空中写真撮影を実施し、実測等記録作業後埋め戻しを行い、２月３日に埋め戻しを完了した。

平成24年２月６日には出土遺物を埋蔵文化財センターへ搬入し、同日県教育庁文化課経由で中津警察署へ埋蔵文化財の発見を通知するとともに、県教育庁文化課および中津市教育委員会へ本調査終了の報告を行った。２月29日には支援業務委託の受託業者から遺構実測図や記録写真等成果品の納入を受け、３月９日の完了検査をもって本事業を終了した。

第３節　整理作業・報告書作成の経過

整理作業および報告書作成作業を平成24年度に実施した。整理作業は基本作業と資料作成業務を一括して委託し、埋蔵文化財センター整理作業棟を作業場所として実施した。委託内容は出土遺物の水洗、出土地点の注記、遺物接合、遺物復元の前半工程と、遺物実測・拓本採取、遺物観察基礎データ作成、遺物実測図のトレース、遺構図のトレースの後半工程、および遺物の区分けや収納等諸作業である。各作業工程ごとに調査担当者が完了確認を行い、作業精度の確保に努めた。

報告書作成に係る遺構・遺物等図版作成作業や原稿執筆、遺物写真撮影、編集作業は調査担当者が整理作業と並行して行った。平成25年１月に原稿を入稿し、3度の校正を経て本書を刊行した。

第４節　調査組織の構成

香榮庵遺跡・挾万田遺跡の調査時の組織は以下のとおりである。

平成23年度　本発掘調査

調査主体　大分県教育委員会

調査機関　大分県教育庁埋蔵文化財センター

調査総括　埋蔵文化財センター　所　長　山口 博文

同　次　長　坂本 嘉弘

調査事務　管理予算班　課長補佐［総括］　春山 義光

同　副 主 幹　徳脇 仁志

同　主　査　福田　文

調査担当　大型事業班　課長補佐［総括］　後藤 一重

同　主　任　横澤　慈（本調査担当）

支援業務受託者　株式会社九州文化財総合研究所

調査技師　畔津 宏幸

調査助手　服部 真和

平成24年度　整理報告書作成

調査主体　大分県教育委員会

調査機関　大分県教育庁埋蔵文化財センター

埋蔵文化財センター　所　長　山口 博文

同　次　長　宮内 克己

調査事務　管理予算班　課長補佐［総括］　春山 義光

同　主　査　山村 光広

同　主　査　福田　文

調査担当　資料管理班　課長補佐［総括］　高橋 信武

同　副 主 幹　染矢 和徳

大型事業班　参　事［総括］　後藤 一重（整理報告書作成担当）

整理作業受託者　株式会社九州文化財総合研究所

整理作業指導員　畔津 宏幸

第２章　遺跡の位置と環境（三光村を中心に）

第１節　地理的環境

香崇庵遺跡、挾万田遺跡は中津市三光地区に所在する。中津市は大分県の北西部に位置し、東は宇佐市、南は日田市・玖珠町、西は一級河川山国川を境に福岡県と接している。平成17年３月に中津市と下毛郡３町１村（山国町・耶馬渓町・本耶馬渓町・三光村）が合併し、現在の市域となっている。

三光地域の地形については、南に標高659.４mの八面山が聳え、中津平野に向かっていくつもの低位丘陵が派生している。また、山国川や二級河川犬丸川とそれらに注ぎ込む小河川の開析によりいくつもの谷筋を形成し、流域には河岸段丘や沖積平野を形成している。遺跡はこれらの河川流域の自然堤防や河岸段丘上、洪積台地上に多く分布している。

この地域の交通機関として、鉄道はかつては耶馬渓鉄道が重要な脚となっていたが、昭和50年９月に廃止され姿を消している。一方道路は国道10号中津バイパスが東西を貫き、国道212号が中津から日田方面に通じ、それぞれ主要幹線として機能している。近年では東九州自動車道と中津日田道路の建設が始まり、道路網の整備が進められている。これらの主要道路に沿って工業団地や大型ショッピングセンターが建設されるなど、開発の波が押し寄せている。

産業は農林業等第一次産業が主であるが、近年の工業団地造成による工場の誘致が進められ、また八面山を中心とした観光も盛んになっている。農業に関しては、昭和40～60年代にかけて各地で圃場整備事業が実施された結果、旧地形が改変され、現在では景観は大きく変化している。香崇庵遺跡・挾万田遺跡のある西秣・下秣地区でも昭和56～60年度に圃場整備が行われている。

第２節　歴史的環境

旧石器時代は上ノ原遺跡、大坪遺跡等で遺物が出土しているが、遺構に伴うものではない。

縄文時代の遺跡では、佐知遺跡・佐知久保畑遺跡・槙遺跡・大坪遺跡で竪穴住居を検出している。大坪遺跡では平成24年度に中津市教育委員会が実施した発掘調査で後期の竪穴住居や掘立柱建物が確認され、竪穴住居の１棟から廃屋葬と考えられる人骨が出土している。また、黒水遺跡や佐知遺跡、池ノ下・能元遺跡等では陥し穴が発掘されている。この他、佐知遺跡と槙遺跡では土偶が出土しており、当時の精神文化の一端を示している。

弥生時代になると、台地や自然堤防上に集落が、台地下の沖積平野上には水田が形成される。前者としては佐知遺跡（中期～後期）や諫山遺跡（中期～後期）、森山遺跡（前期～後期）等がある。特に諫山遺跡は台地上に大規模な集落遺跡が展開していることが明らかとなった。後者としては樋多田遺跡があり、水田層とともに杭で護岸された水路が発掘されている。また、上ノ原平原遺跡や諫山遺跡等では貯蔵穴群が検出され、水田経営や堅果類の利用といった当時の生業のあり方を示している。また、原口遺跡や諫山遺跡、岡崎遺跡では石蓋土坑墓や石棺墓からなる墓域が見つかっている。その他、佐知遺跡で細形銅剣、諫山遺跡では磨製石剣が出土している。

続く古墳時代でも台地や自然堤防上に集落が、台地下の低地部に水田が展開する。大坪遺跡や佐知遺跡、佐知久保畑遺跡等の集落や、樋多田遺跡の水田遺構が発掘されている。また、古墳群や横穴墓群の形成が顕著となる。遺跡としては山国川流域の上ノ原横穴墓群や臼木古墳群、犬丸川流域の洗添横穴墓群、倉迫平古墳、大源寺横穴墓群等がある。また、成恒笹原遺跡では４～５世紀のミニチュア土器が多量に出土し、八面山に関する祭祀遺跡と考えられている。

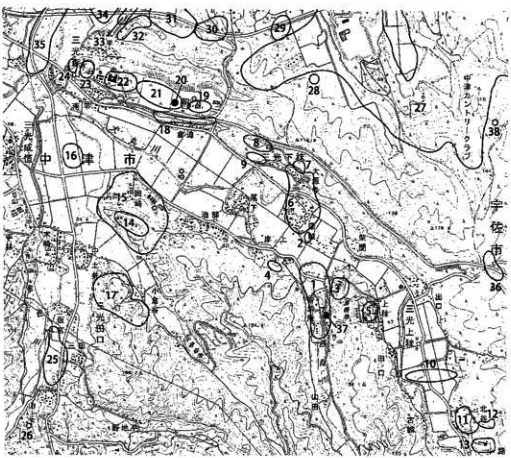
古代の遺跡としては、８世紀後半の創建とされる塔ノ熊廃寺があり、新羅系の瓦が出土している。隣接する塔ノ熊窯跡からは10世紀代の瓦が出土している。池ノ下・能元遺跡では緑釉緑彩陶器や蛸壺が出土している。また、八面山山頂には信仰遺跡が形成され、麓の山下経塚からは康和４（1102）年・保安元（1120）年銘の銅製経筒が出土している。

中世には在地土豪として深水氏・成恒氏・田口氏、秣氏等の活動が知られ、その城館としてズリヤネ城、田島

崎城、田口氏の地神城、秣城等が点在する。ズリヤネ城の近くにある深水邸埋納遺跡では備前焼大甕中に土師器皿や銭貨、五徳等を埋納した遺構が発見され、出土品は県の有形文化財に指定されている。また、南北朝～戦国期の石造物が各所に点在している。特に西秣地区には多く認められ、長谷寺と香紫庵に所在する宝塔は中津市の有形文化財に指定されている。

16世紀末には豊前のうち下毛郡等６郡が黒田孝高に与えられ、その領地となっている。黒田氏の支配の後、細川氏を経て小笠原氏が中津藩主となり、三光地域も多くが中津藩領となって廃藩置県を迎えている。明治22年の町村制施行に伴い、真坂村・山口村・深秣村の3村が誕生したが、昭和28年にこの3村が合併して三光村となり、平成17年のいわゆる平成の大合併で現在の中津市となっている。

1	香紫庵遺跡	2	挟万田遺跡	3	塔ノ熊廃寺・塔ノ熊窯跡	4	西秣大迫遺跡
5	上秣城跡	6	大源寺遺跡	7	大源寺横穴墓群	8	三ツ塚古墳群
9	天神原横穴墓群	10	池ノ下・能元遺跡	11	春畑遺跡	12	カシミ遺跡
13	ズリヤネ城跡	14	岡崎城跡	15	岡崎遺跡	16	鳴ノ町遺跡
17	田口遺跡	18	野辺田横穴墓群	19	倉迫二ツ塚古墳	20	倉迫平１号墳
21	倉迫平遺跡	22	美濃尾遺跡	23	北平城跡	24	先祖横穴墓群
25	仮宮遺跡	26	山下経塚	27	野依・伊藤田窯跡群	28	才木遺跡
29	安平遺跡	30	寺迫遺跡	31	森山遺跡	32	北平横穴墓群
33	権現島遺跡	34	樋多田遺跡	35	大坪遺跡	36	上山田横穴墓群
37	香紫庵宝塔	38	野依烽火台				



第1図　三光地域の遺跡分布図 (S=1/25,000)

第３章　香紫庵遺跡の調査

第１節　調査区の設定

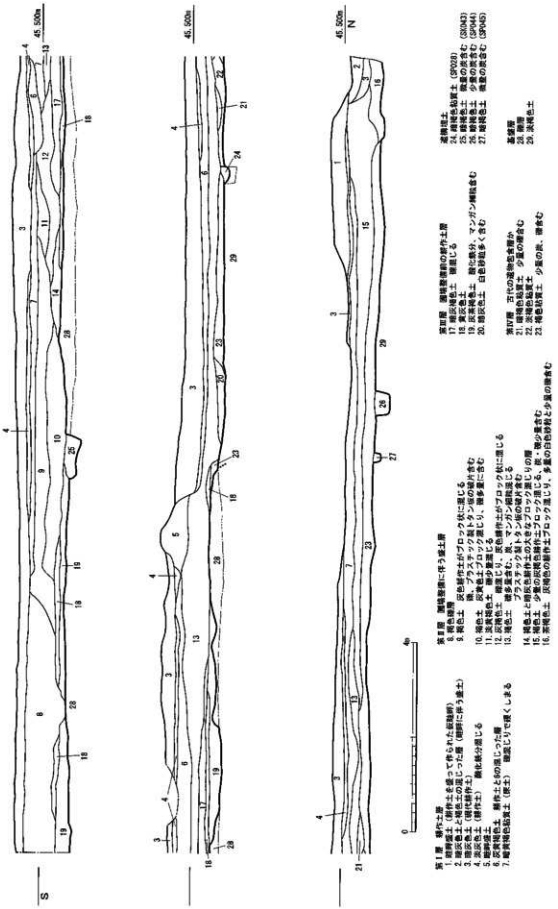
調査を実施した香紫庵遺跡は、中津市三光西秣字香紫庵を中心に広がる遺跡で、調査地点の小字名は楢本である。香紫庵遺跡のすぐ東の丘陵上には８世紀後半に創建されたといわれる古代寺院塔ノ熊廃寺[註1]が、南西には中世の掘立柱建物等を検出した西秣大迫遺跡[註2]が位置している。特に塔ノ熊廃寺に関しては、周辺に当該時期の集落遺跡が確認されておらず、この頃の遺跡の存在が予想される地域である。しかし、遺跡一帯は既に圃場整備が実施され、また過去に西秣川の付け替え工事も行われており、旧地形が大幅に改変されている。そのため、中津三光道路に伴う試掘調査でも遺構を確認できたのは後述のごく一部に過ぎない。昭和60年度の圃場整備前の試掘調査でも弥生時代～近世の遺物は出土したものの、遺構は確認されていない[註3]。

調査対象地は西秣川右岸の微高地上の水田で、直角三角形状をした437㎡である。調査前の標高は北側では約45.2m、南側では約46mを測る。水路を挟んで西側は標高44.8mで、一段低くなっている。この西側部分は平成22年度の試掘調査では、表土を除去すると氾濫原の礫層が検出される状況で、遺構は全く確認されず、調査対象からは除外した。おそらくは圃場整備時の造成により削平を受けているものと思われる。逆に本調査地は盛土施工部分であったため、遺跡の破壊を免れた部分であったことが地元住民の聞き取りで分かった。

調査にあたっては、世界測地系に基づき10m方眼のグリッドを設定した。各グリッドには南北方向にA～Gのアルファベット、東西方向に１～３の数字を付し、各グリッドの呼称は両者を組み合わて使用した（A1～G3グリッド、第４図）。なお、出土遺物については調査面積が小さく、また遺物量も多くないため、出土地点を記録

第2図　香紫庵遺跡位置図（S=1/4,000）

註1）村上久和・吉田　寛 1989『三光村の遺跡－大分県下毛郡三光村に所在するズリヤネ城跡・深水邸埋納遺跡・塔ノ熊廃寺・塔ノ熊窯跡の発掘調査報告－』三光村文化財調査報告書第１集、三光村教育委員会
平田由美 2006『塔ノ熊廃寺』中津市文化財調査報告第39集、中津市教育委員会
註2）東九州自動車道の建設に伴い、平成23年度に大分県教育庁埋蔵文化財センター（担当：原田昭一氏）が調査を実施した。
註3）小林昭彦 1986「八面山東部地区（三光村）」『大分県内遺跡詳細分布調査概報５』大分県教育委員会



第3図　香紫庵遺跡調査区西壁土層断面図

したもの以外は特にグリッドごとの区別を行ってはいない。

遺構については、検出した順に「S-○○」の遺構番号を付した。報告書作成時に遺構種別に応じた遺構略号を使用したが、遺構番号の振り直しは行なっていない。

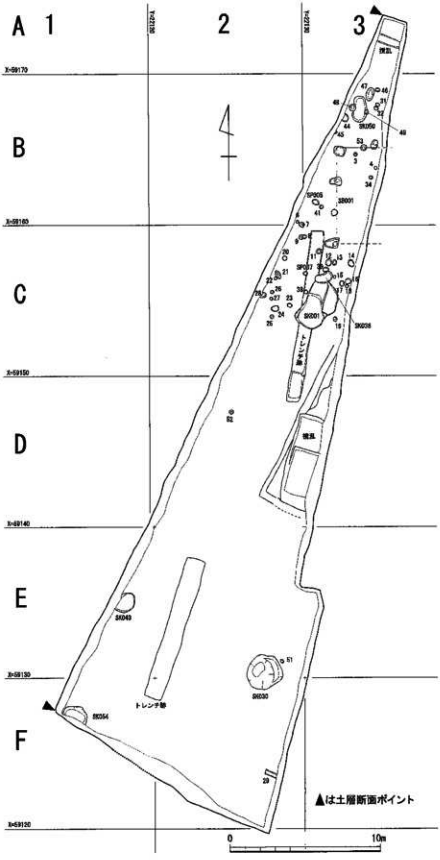
第2節　調査区の基本層序

調査区の土層断面図を第3図に示す。第Ⅰ層は水田の耕作土である。第Ⅱ層は水田の床土層で、酸化鉄分が沈着し硬化している。第Ⅲ層は圃場整備時の盛土と考えられる層である。一部土層の色調は第Ⅳ層と酷似するが、耕作土に由来する灰色系のブロック土が混じっており、圃場整備時に包含層と耕作土層が攪拌されたものと考えられる。第Ⅳ層は褐色土で、後述の古代の遺構を検出した範囲に認められる。遺物は少量ながら黒曜石剥片や土器が出土しているので、包含層がわずかに残っていたものと思われる。第Ⅴ層は基盤層で、北半部では淡褐色粘質土、南半部では氾濫原の礫層が認められた。

第3節　調査の成果

香紫庵遺跡の遺構配置図を第4図に示す。

遺構としては縄文時代の土坑1基、古代の土坑や掘立柱建物、ピットが認められた。遺構は調査区の中央から北半部にかけて多く分布しており、南半部では少ない。これは前節でも触れたがベース面の土質とも関係しており、河川氾濫原にあたる礫層の広がりが南半部に見られることから、生活には不向きであったためであろう。



第4図　香紫庵遺跡遺構配置図

以下、主要な遺構について報告する。その他の遺構については遺構一覧表に規模等概要をまとめた。

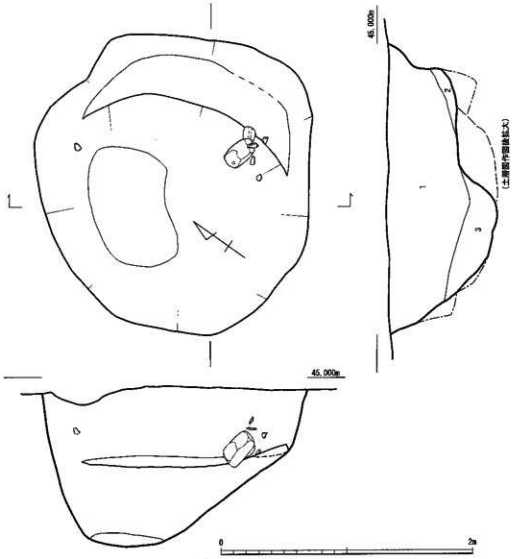
第1表　香紫庵遺跡遺構一覧表

遺構名	遺構種別	グリッド	検出高	遺構規模(m)			遺構埋土		備考
			(m)	長径	短径	深度	色調	混入物	
SK001	土坑	C2・C3	44.908	3.37	2.06	0.88	個別図参照		S-036に切られる
SP002	掘立柱建物	B3	44.864	0.44	(0.29)	0.30	暗褐色土	礫少量、炭微量	S-033と重複
SP003	ピット	B3	44.826	0.25	0.25	0.34	暗褐色土	炭微量	
SP004	ピット	B3	44.874	0.23	0.20	0.12	暗褐色土	炭微量	
SP005	ピット	B3	44.860	0.50	0.36	0.30	暗褐色土	礫、炭少量	
SP006	ピット	B2	44.896	0.21	0.18	0.23	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP007	ピット	B2・B3・C2・C3	44.897	0.37	0.33	0.32	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP008	ピット	C3	44.845	0.26	0.26	0.23	暗褐色土	炭微量	S-009を切る
SP009	ピット	C2	44.843	0.30	(0.26)	0.21	暗褐色土	小礫・炭少量	S-008に切られる
SP010	掘立柱建物	C3	44.903	0.92	0.68	0.46	個別図参照		
SP011	ピット	C3	44.801	0.36	0.36	0.34	暗褐色土	炭微量	
SP012	ピット	C3	44.861	0.48	0.38	0.26	黒褐色土	炭少量	
SP013	ピット	C3	44.868	0.38	0.28	0.22	黒褐色土	炭微量	
SP014	ピット	C3	44.883	0.50	0.37	0.24	個別図参照		
SP015	ピット	C3	44.886	0.22	0.19	0.31	暗褐色土	炭微量	
SP016	ピット	C3	44.920	0.40	0.38	0.40	暗褐色土	炭微量	
SP017	ピット	C3	44.898	0.38	0.31	0.31	暗褐色土	炭微量	
SP018	ピット	C3	44.912	0.22	0.22	0.38	褐色土	炭微量	
SP019	ピット	C3	44.834	0.28	0.26	0.37	褐色土	炭微量	
SP020	ピット	C2	44.824	0.31	0.31	0.23	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP021	ピット	C2	44.904	0.60	0.32	0.53	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP022	ピット	C2	44.897	0.21	0.21	0.46	暗褐色土	炭微量	
SP023	ピット	C2	44.875	0.35	0.27	0.07	暗灰褐色土	炭微量	
SP024	ピット	C2	44.881	0.52	0.42	0.13	暗褐色土	炭微量	
SP025	ピット	C2	44.873	0.27	0.26	0.36	暗褐色土	小礫・炭微量	
SP026	ピット	C2	44.877	0.24	0.21	0.48	暗褐色土	炭微量	
SP027	ピット	C2	44.868	0.22	0.21	0.52	暗褐色土	炭微量	
SP028	ピット	C2	44.893	0.38	(0.34)	0.29	暗褐色土		
SD029	溝	F2	44.865	(0.80)	0.30	0.15	黒褐色土		
SK030	土坑	E2・F2	44.923	3.61	3.40	1.25	個別図参照		
SP031	ピット	B3	44.743	0.30	0.21	0.33	暗褐色土	炭微量	
SP032	ピット	B3	44.743	0.32	0.25	0.29	暗褐色土	炭微量	
SP033	掘立柱建物	B3	44.829	0.36	(0.34)	0.44	黒褐色土	炭少量	S-002と重複
SP034	ピット	B3	44.856	0.26	0.22	0.32	暗褐色土	小礫・炭微量	
SP035	掘立柱建物	B3	44.866	0.44	0.44	0.28	暗褐色土	小礫少量、炭微量	
SP036	土坑	C3	44.908	1.15	0.66	0.42	黒褐色土	礫・炭少量	S-001を切る
SP037	ピット	C3	44.915	0.31	0.27	0.28	暗褐色土	炭微量	
SP038	ピット	C3	44.817	0.27	0.26	0.09	暗褐色土	炭微量	
SP039	ピット	C3	44.860	0.40	0.31	0.23	暗褐色土	炭微量	
SP040	掘立柱建物	B3	44.855	0.81	0.56	0.60	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP041	ピット	B3	44.859	0.28	0.26	0.18	暗褐色土	礫少量、炭微量	
SP042	掘立柱建物	B3	44.791	0.80	0.62	0.41	個別図参照		
SK043	土坑	E1	44.989	1.56	1.14	0.23	暗褐色土	炭微量	
SP044	ピット	B3	44.751	0.50	(0.38)	0.31	暗褐色土	炭少量	
SP045	ピット	B3	44.791	0.21	(0.15)	0.25	暗褐色土	炭微量	
SP046	ピット	B3	44.869	0.34	0.24	0.23	褐色土	炭微量	
SK047	土坑	B3	44.687	0.90	0.52	0.39	暗褐色土	炭微量	
SP048	ピット	B3	44.698	0.44	0.44	0.29	暗褐色土	炭微量	S-050を切る
SP049	ピット	B3	44.692	0.28	0.26	0.29	暗褐色土		S-050を切る
SK050	土坑	B3	44.731	1.76	0.94	0.31	暗褐色土	炭・焼土細粒微量	S-048・049に切られる
SP051	ピット	E2	44.931	0.26	0.21	0.17	暗灰褐色土		
SP052	ピット	D2	44.888	0.28	0.28	0.17	暗褐色土	小礫・炭少量、砂粒多い	
SP053	ピット	B3	44.847	0.44	0.38	0.36	暗褐色土	炭少量	
SK054	土坑	F1	45.007	1.66	(0.96)	0.19	個別図参照		

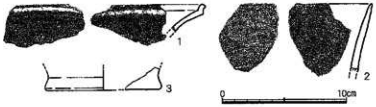
1．縄文時代の遺構

土坑　SK030（第５図）

調査区の南半部、E2・F2グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形気味の不整形で、長辺3.61m、短辺3.40m、深さ1.25mを測る。内部は東側にテラス状の段が付く。埋土は３層に分層でき、大きく上層と下層に分けられる。上層は暗褐色土で多量の礫や白色砂粒を含み、下層は上層より粘性を帯びた暗褐色土である。遺物は縄文土器の他、黒曜石の剥片が多数出土しており、特に上層発掘時に出土したものが多い。上層と下層の境付近あたりに約30cmの礫が認められ、その周辺から浅鉢等４点の土器が出土している。下層から時期判定できる遺物は出土していないが、縄文土器と黒曜石細チップ以外に他時期の遺物が出土していないことから、縄文時代の遺構と考えられる。したがって、出土した黒色磨研土器浅鉢の口縁部形状から、晩期初頭に比定する。



第5図　SK030実測図



第6図　SK030出土遺物実測図

SK030出土遺物（第６図）

１～３は縄文土器である。１は黒色磨研土器の浅鉢口縁部破片で、外に開きながら端部は上方に折れ、内側には段が付く。２は深鉢である。口縁端部は丸くおさめ、外面には横位の条痕を施す。３は深鉢の底部で、底径10.0cmを測る。内面は剥落している。１の浅鉢の特徴から晩期初頭に位置づけられるもので、２・３も同時期であろう。

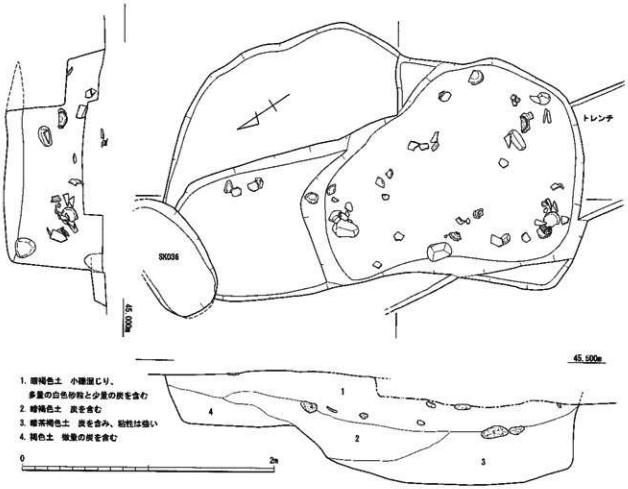
２．古代の遺構

土坑　SK001（第７図）

調査区の北半部で検出した土坑である。平面形状は長方形状を呈し、長辺3.37m、短辺2.06m、深さ0.88mを測る。北側の一部は土坑SK036に切られる。内部は南半部が深く掘り込まれる形状で、特にこの部分から多量の遺物が出土している。埋土は４層に分層でき、いずれも炭を含む。１層は小礫混じりの暗褐色土で多量の白色砂粒を含む。２層は暗褐色土、３層は暗茶褐色土で強い粘性を帯びる。４層は褐色土である。出土遺物は須恵器、土師器、製塩土器がある。

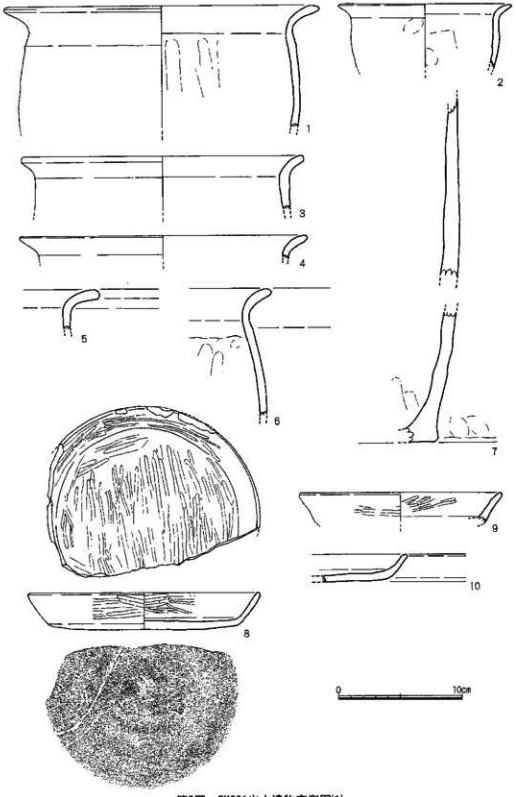
SK001出土遺物（第８～10図）

第８図は土師器である。１～６は甕で、いずれも胴部の膨らみは弱く、口径を上回るものはない。２は小型の甕である。７は平底で上方に直に立ち上がるものであるが、器種は不明である。底部からの立ち上がり部分にはユビオサエが認められる。８～10は坏で、８・９は内外面にヘラミガキを施す。８の底面にはヘラ切り離し痕が残る。

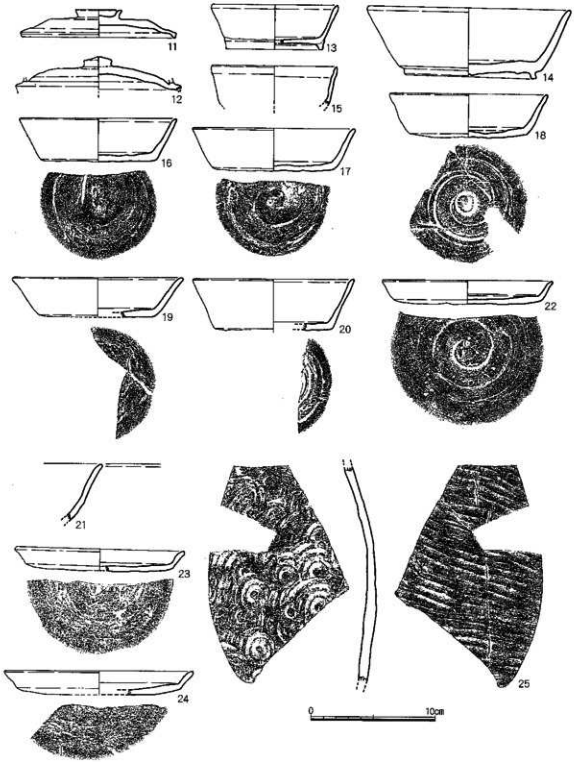


第7図　SK001実測図

第９図は須恵器である。11・12は坏蓋で、ともに摘みを有する。11は高台状の摘みを持ち、摘み部の直径は3.9cmを測る。12は宝珠形の摘みを持ち、外面には窯詰め時の重ね焼き痕が残る。13・14は高台付きの坏で、13は口径10.6cmと小型である。15も11と同様小型の製品である。16～21は坏で、口径13.0～14.0cm、器高3.4～4.2cmを測る。16～20の底面にはヘラ切り離し痕が残る。16は底面に直線状のヘラ記号を施す。22～24は皿状の坏である。口径14.2～16.0cm、器高1.8～2.0cmを測る。いずれも口縁部は外反し、底面にはヘラ切り離し痕が残る。25は甕の胴部破片で、外面に平行タタキ、内面に同心円状の当て具が残る。



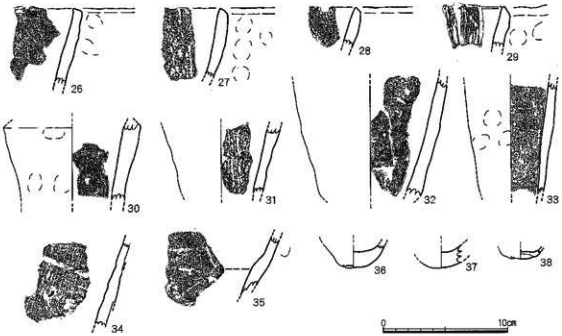
第8図　SK001出土遺物実測図(1)



第9図　SK001出土遺物実測図(2)

第10図は製塩土器である。いずれも内面には布目痕を有し、底部（36～38）は丸底である。

以上の出土遺物は、土師器坏及び須恵器坏蓋・坏の形状から、８世紀後半代に位置づけられる。



第10図　SK001出土遺物実測図(3)

掘立柱建物　SB001（第11図）

調査区の北半部で検出した建物跡である。柱穴５個の並びを確認しており、南北方向３間、東西方向１間以上の規模で、調査区外に続くため全体の規模は明らかにできない。柱穴の遺構番号はSP002・033、010・035・040・042である。このうちSP002とSP033は重複しているが、本来は同一の遺構で柱穴埋土の違いであった可能性がある。柱穴の構造には共通性があり、SP035を除き形状は楕円形ないしは卵形を呈し、柱穴の一方に寄る形で柱を据えている。SP042も土層断面の観察から柱部分が一方に寄っていることが分かる。また、柱穴内部からは比較的残存状況の良い遺物が出土することも共通する。埋土はいずれも暗褐色ないし黒褐色を呈し、炭や小礫を含むものが多い。

SB001出土遺物（第12図）

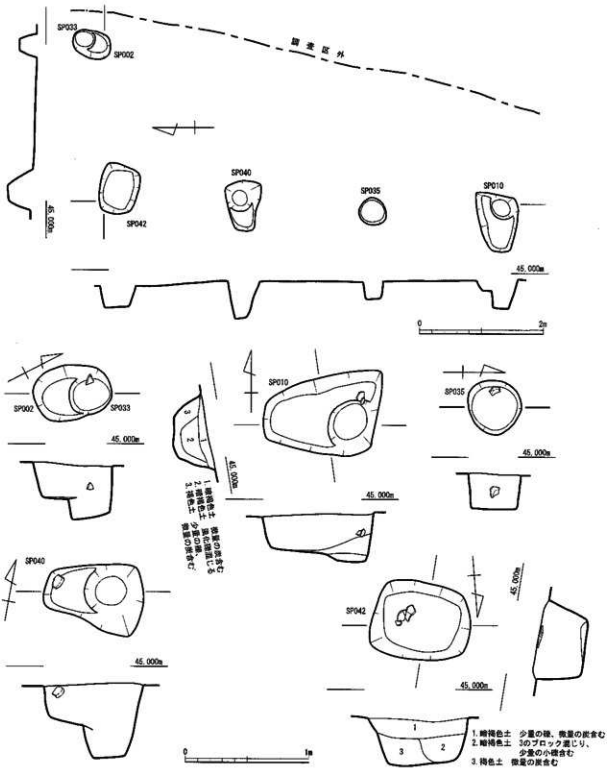
１は土師器の坏である。口径14.8cm、器高4.6cmを測る。器形は外に開きながら直線的に立ち上がり、口縁は外反する。底面はヘラ切り離しの痕跡をナデ消している。SP035から出土した。２は土師器の鍋である。口径21.6cmを測り、胴部は膨らまずに底部に続く。SP040から出土した。３は須恵器の坏蓋である。口径12.8cm、器高1.6cmを測る。SP010から出土した。

３．その他の遺構（第13図）

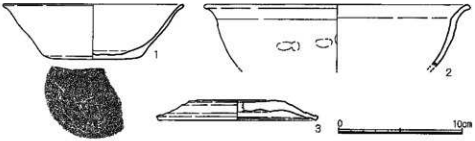
ここでは前節までに取り上げたもの以外の土坑やピットを報告する。時期判定できるような遺物の遺物がなく帰属時期を明確にできないが、中には古代に属するものもある。遺構図を第13図にまとめて掲載した。

SK036

調査区の北半部で検出した、SK001を切る土坑である。平面形状は楕円形を呈し、長辺1.15m、短辺0.66m、深さ0.42mを図る。埋土は黒褐色土で、少量の礫・炭を含む。図示できるような遺物の出土は認められないが、遺構の時期は8世紀後半の土坑SK001を切ることから、それ以降の年代が与えられる。



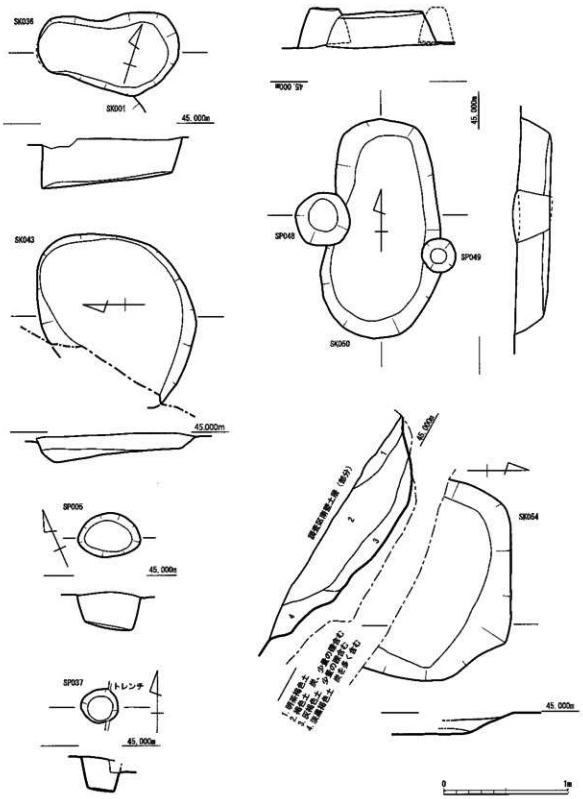
第11図　掘立柱建物SB001実測図



第12図　掘立柱建物SB1出土遺物実測図

SK050

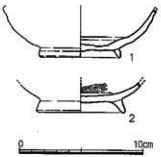
調査区北部で検出した土坑である。東西両側は２基のピットSP048・049に切られるが、平面形状は楕円形を呈し、長辺1.76m、短辺0.94m、深さ0.31mを測る。埋土は暗褐色土で、焼土・炭の微細粒を含む。遺構の時期を明らかにできるような遺物の出土はない。



第13図　その他の遺構実測図

SK054

調査区の南西端で検出した土坑である。東西1.66m、深さ0.19mを測り、南北は調査区外に続く。埋土は4層に分層でき、4層中には多量の炭を含む。検出したレベルで図化したが、本来はもう少し上面から掘り込む遺構であることが土層図からわかる。遺物の出土がないため、遺構の時期は明らかにできない。



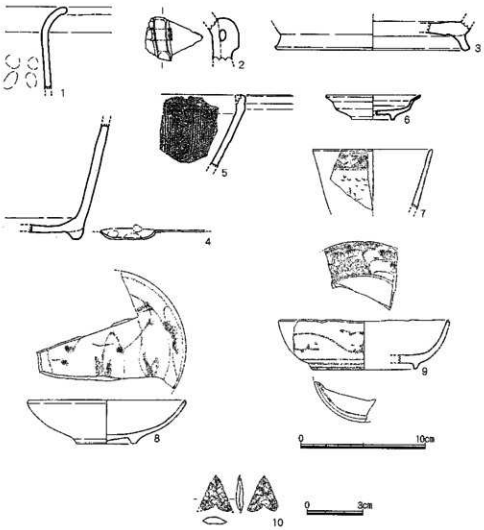
第14図　その他の遺構出土遺物実測図

SP005

調査区北半部のB3グリッドで検出したピットである。平面形状は楕円形で、長辺0.50m、短辺0.36m、深さ0.30mを測る。埋土は暗褐色土で、礫と少量の炭を含む。遺物は高台付きの土師器椀が出土しており、古代に属する遺構である。

SP005出土遺物

第14図1は高台付きの土師器椀である。口縁部を欠損するが、口径12.5cmに復元でき、現存器高4.1cm、高台径6.5cmを測る。



第15図　調査区出土遺物実測図(1)

SP037

C3グリッドで検出したピットである。平面形状は円形を呈し、直径0.30m、深さ0.28mを測る。埋土は暗褐色土で微量の炭を含む。出土した黒色土器の特徴から、9世紀頃の遺構と考えられる。

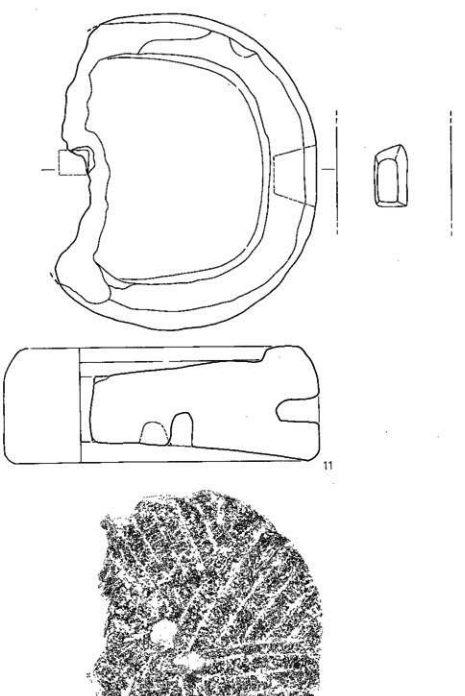
SP037出土遺物

第14図2は黒色土器である。内黒のA類椀で、内面にはヘラミガキを施す。

4．調査区出土遺物（第15・16図）

表土除去時や遺構検出作業中に出土した遺物のうち、主要なものを第15・16図に掲載した。

1は土師器の甕である。2は須恵器で、壺の肩部に付された摘みであろうか。摘み部には楕円形の穴が貫通し、長径9mmを測る。3は高台付きの須恵器で、壺の底部であろう。4は瓦質土器の火鉢で、底部には逆台形状の短い脚が付く。5は瓦質土器の摺鉢で、8条1単位の摺目を施す。6は白磁の小坏である。高台の畳付には砂が付着する。7～9は染付磁器である。7は小型の碗、8・9は皿で、いずれも近世の肥前系磁器である。10は姫島産黒曜石製の打製石鏃で、縄文時代の土坑SK030の周辺から出土した。第16図11は石臼の上臼である。直径33cm、高さ12cmを測り、上部には穀物等を入れるためのもの入れ穴が、側面には挽手穴が穿たれる。摺目の摩耗により不鮮明ではあるが、副溝の数から分画は6分画6溝[註4]と判断される。



第16図　調査区出土遺物実測図(2)

以上のうち、1・3・4・7～9は表土層等の掘削時、2・5・6・10・11は遺構検出作業時の出土である。

註4）三輪茂雄 1978『臼』ものと人間の文化史25、法政大学出版会

第４節　小結

香紫庵遺跡の発掘調査では、大きく２時期の遺構を確認することができた。

まずは縄文時代晩期初頭の土坑SK030であるが、当該地周辺ではこれまで縄文時代の明確な遺構に乏しく、様相が不明であった。SK030は直径が２m以上と大型ではあるが、遺構の性格は必ずしも明確ではない。しかし、SK030の周辺から１点ではあるが石鏃が出土していること、遺構内部から小型の黒曜石剥片が一定量出土していることから、石器製作が行われていたものと考えられる。その一方で土器が少なく、狩猟具以外の石器が見られない点は、当該地周辺が集落地であるというよりは狩猟のキャンプサイト的なものであったことを示している。

次に遺跡のメインとなるのは古代である。特に多量の遺物が出土した大型土坑SK001と、礎立柱建物SB001は特筆される。特にSK001は出土遺物から８世紀後半の遺構と考えられ、SB001もほぼ同じころと考えられる。この年代は周辺に位置する古代寺院塔ノ熊廃寺の創建時期と合致しており、塔ノ熊廃寺に関わる集落であった可能性が高い。塔ノ熊廃と関連する集落としては初の発見ということができるが、これまで周辺地の調査でも建物等の遺構が確認されていないことからすると、集落規模としては小さいものであった可能性が考えられる。寺院の周辺には小規模な集落が点在していたような景観であったのであろうか。

また、SK001からは須恵器や土師器とともに六連島式の製塩土器がまとまって出土しており、良好な一括資料であるとともに、遺跡の性格を考える上で重要である。香紫庵遺跡は海岸線から直線距離にして５km以上も内陸に位置することから、当地で土器製塩を行っていたとは到底考えられず、これらは海岸部から流通によってもたらされたものである。これらの製塩土器がもたらされた要因としては、やはり塔ノ熊廃寺を抜きには考えがたい。また、塩の流通が寺院の経済基盤の一端を担っていた可能性もあろう。ともあれ、近年内陸地からの製塩土器の出土事例も増えてきており[註5]、塩の流通を考える上で重要な資料になるといえる。

また、SP005やSP037からは黒色土器A類椀が出土しており、SK001やSB001に後続する時期の遺構である。これらの遺構は９世紀代と考えられ、遺跡としては８世紀後半～９世紀にかけて継続したものと判断される。

第2表　香紫庵遺跡出土遺物観察表(1)

挿図番号		器種	出土地点・層位	口径・底径等 (cm)	器高 (cm)	調整・施文	構成	色調	備考
第6図	1	縄文土器　浅鉢	SK030	―		外面 ヨコナデ→横位ミガキ 内面 ヨコナデ	良好	外面 黒褐色 内面	
	2	縄文土器　深鉢	SK030	―		外面 横位条痕 内面 ナデ	良好	外面 黒褐色 内面 淡褐色	
	3	縄文土器　深鉢	SK030	底径　(10.0)		外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ―	良好	外面 橙褐色 内面 ―	内面剥離
第8図	1	土師器　甕	SK001下層	口径　(26.0)	(10.3)	外面 ヨコナデ、縦位工具ナデ 内面 ヨコナデ、横位ナデ	良好	外面 にぶい橙色 内面	
	2	土師器　甕	SK001	口径　(14.2)	(5.4)	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、横位板ナデ	良好	外面 にぶい褐色 内面	
	3	土師器　甕	SK001	口径　(23.6)	(4.6)	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 橙色 内面	
	4	土師器　甕	SK001上層	口径　(24.2)	(2.0)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 にぶい褐色 内面	
	5	土師器　甕	SK001			外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 にぶい橙色 内面	
	6	土師器　甕	SK001上層		(10.8)	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、縦位ナデ	良好	外面 にぶい黄橙色 内面	
	7	土師器	SK001			外面 ナデ、工具ナデ 内面 ナデ、工具ナデ	良好	外面 橙色 内面	
	8	土師器　坏	SK001	口径　(17.6)	2.8	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヘラミガキ	良好	外面 橙色 内面	底面ヘラ切り離し
	9	土師器　坏	SK001上層	口径　(17.0)	(2.5)	外面 ヨコナデ、ヘラミガキ 内面 ヘラミガキ	良好	外面 橙色 内面	
	10	土師器　坏	SK001上層		2.3	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 にぶい橙色 内面	
第9図	11	須恵器　坏蓋	SK001	口径　(13.0)	2.3	外面 回転ヘラケズリ→ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 暗灰色 内面	
	12	須恵器　坏蓋	SK001上層	口径　(14.0)	(2.7)	外面 回転ヘラケズリ、ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 暗灰色 内面	重ね焼き痕あり
	13	須恵器　高台付坏	SK001上層	口径　(10.6) 底径　(8.2)	3.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 暗灰色 内面	

註5）平田由美 2010『大勢遺跡』中津市文化財調査報告第49集、中津市教育委員会
綿貫俊一・吉田　寛 2011『井尻日施田遺跡』大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書第54集、大分県教育庁埋蔵文化財センター

第2表　香紫庵遺跡出土遺物観察表(2)

挿図番号		器種		出土地点・層位	口径・底径等 (cm)	器高 (cm)	調整・施文	焼成	色調		備考
第9図	14	須恵器	高台付坏	SK001下層	口径 17.0 底径 10.6	5.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ナデ	良好	外面 内面	にぶい黄橙色、 灰褐色	
	15	須恵器	坏	SK001	口径 (10.4)	(3.3)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰色	
	16	須恵器	坏	SK001下層	口径 13.0 底径 9.8	3.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰白色	底面ヘラ切り離し、底面にヘラ記号
	17	須恵器	坏	SK001下層	口径 (13.4) 底径 (10.2)	3.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰白色	底面ヘラ切り離し
	18	須恵器	坏	SK001下層	口径 (13.0) 底径 10.0	3.7	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰白色	底面ヘラ切り離し
	19	須恵器	坏	SK001	口径 (14.0) 底径 (9.6)	3.4	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	不良	外面 内面	灰黄褐色、 暗褐色	底面ヘラ切り離し
	20	須恵器	坏	SK001下層	口径 (13.6) 底径 (9.8)	4.2	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	淡黄褐色	底面ヘラ切り離し
	21	須恵器	坏	SK001			外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰色	
	22	須恵器	坏	SK001	口径 (14.2) 底径 (12.6)	2.0	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	灰白色	底面ヘラ切り離し
	23	須恵器	坏	SK001	口径 (14.2)	1.8	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	オリーブ灰色	底面ヘラ切り離し
	24	須恵器	坏	SK001	口径 (16.0)	2.0	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	オリーブ灰色	底面ヘラ切り離し
	25	須恵器	甕	SK001			外面 平行タタキ 内面 同心円文の当具痕	良好	外面 内面	黒褐色	自然釉付着
第10図	26	製塩土器		SK001			外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ	良好	外面 内面	灰褐色	布目痕ナデ消し?
	27	製塩土器		SK001			外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ	良好	外面 内面	淡黄褐色	
	28	製塩土器		SK001下層			外面 ナデ 内面 布目痕	良好	外面 内面	にぶい橙色	
	29	製塩土器		SK001下層			外面 ナデ、指頭圧痕 内面 布目痕、板ケバ	良好	外面 内面	にぶい褐色	
	30	製塩土器		SK001	最大径 (11.6)	(6.5)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、布目痕	良好	外面 内面	橙色	
	31	製塩土器		SK001	最大径 (10.0)	(5.5)	外面 ナデ 内面 ナデ、布目痕	良好	外面 内面	淡黄褐色	
	32	製塩土器		SK001	最大径 (12.8)	(9.5)	外面 ナデ 内面 ナデ、布目痕	良好	外面 内面	橙色	
	33	製塩土器		SK001	最大径 (7.8)	(9.0)	外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ、布目痕	良好	外面 内面	にぶい黄橙色	
	34	製塩土器		SK001			外面 ナデ 内面 布目痕	良好	外面 内面	にぶい橙色	外面剥落多い
	35	製塩土器		SK001			外面 ナデ 内面 ナデ	良好	外面 内面	淡黄褐色	
	36	製塩土器		SK001下層	底径 2.0	(2.0)	外面 ナデ 内面	良好	外面 内面	灰褐色 にぶい橙色	
	37	製塩土器		SK001			外面 内面 ナデ	良好	外面 内面	橙色	
	38	製塩土器		SK001			外面 ナデ 内面 ナデ	良好	外面 内面	にぶい黄橙色	
第12図	1	土師器	坏	SB001 (SP035)	口径 (14.8) 底径 (7.8)	4.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	淡褐色	底面ヘラ切り離し
	2	土師器	鍋	SB001 (SP040)	口径 (21.6)	(5.1)	外面 ヨコナデ、板状工具ナデ 内面 ヨコナデ、板状工具ナデ	良好	外面 内面	茶褐色	二次焼成を受ける、黒斑あり
	3	須恵器	坏蓋	SB001 (SP010)	口径 (12.8)	1.6	外面 ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	淡灰褐色	
第14図	1	土師器	高台付椀	SP005	底径 6.5	(4.1)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	橙褐色	
	2	黒色土器	椀	SP037	底径 (7.0)	(2.5)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ、ヘラミガキ	良好	外面 内面	淡褐色 黒色	A類標
第15図	1	土師器	甕	表土			外面 ヨコナデ、工具ナデ 内面 ヨコナデ、指頭圧痕	良好	外面 内面	淡褐色	
	2	須恵器	壺	遺構検出時			外面 ナデ 内面 ヨコナデ	良好	外面 内面	暗灰色	
	3	須恵器	壺	調査区一括	底径 (16.0)	(2.6)	外面 ヨコナデ 内面 ナデ	良好	外面 内面	黒灰色	
	4	瓦質土器	火鉢	表土		(9.8)	外面 工具ナデ 内面 ナデ	良好	外面 内面	茶褐色	
	5	瓦質土器	擂鉢	遺構検出時			外面 ヨコナデ、工具ナデ 内面 ヨコナデ、擂目	やや不良	外面 内面	淡褐色	
	6	白磁	小坏	遺構検出時	口径 (8.0) 底径 (3.6)	2.1	外面 ナデ、施釉 内面 ナデ、施釉	良好	外面 内面	明緑灰色	高台畳付に砂付着
	7	染付磁器	小碗	表土	口径 (9.8)		外面 施釉、口縁下四方陣 内面 施釉	良好	外面 内面	青灰色	
	8	染付磁器	皿	表土	口径 (13.0) 底径 5.0	3.6	外面 施釉 内面 施釉、文様不明	良好	外面 内面	灰白色	
	9	染付磁器	皿	表土	口径 (14.0) 底径 (8.8)	–	外面 施釉、荒草文 内面 施釉、植物文	良好	外面 内面	灰白色	
	10	打製石器	石鍬	E2グリッド 遺構検出時	長さ 2.0 幅 1.8 厚さ 0.4		両面とも調整剥離で整形				姫島産黒曜石製 重量0.8g
第16図	11	石臼	上臼	F2グリッド 遺構検出時	直径 33.0	12.0	上面 研磨による加工・整形 下面 6分割6溝の擬目				軸芯穴直径3.0cm

第４章　挟万田遺跡の調査

第１節　調査区の設定

挟万田遺跡は中津市三光下秣字挟万田に所在する。遺跡のすぐ北には中世の包蔵地として大源寺遺跡が周知されているが、発掘調査が行われておらず詳細は不明である。また周辺には香紫庵遺跡、塔ノ熊廃寺・塔ノ熊窯跡、西秣大迫遺跡が分布し、犬丸川の北岸の丘陵斜面上には大源寺横穴墓群や天神原横穴墓群等の墓域が広がっている。中津三光道路の建設に伴う香紫庵遺跡の発掘調査地点とは直線距離にして約300m、秣小学校下にある塔ノ熊廃寺とは約500mの位置にあたる。

遺跡は犬丸川左岸に広がる河岸段丘上に立地し、遺跡から犬丸川に向かって急激に低くなっている。試掘調査でも挟万田遺跡より低い位置では全体的に氾濫原の礫層が広がっている。

調査対象地は県道円座中津線から中津三光道路に接続する車線予定部分で、調査面積は1520㎡である。現状では水田として利用されており、標高は約41.3～41.7mを測る。

調査区には世界測地系に基づき10m方眼のグリッドを設定した。各グリッドには南北にA～Hのアルファベット、東西に１～６の数字を付し、双方を組み合わせたものをグリッドの呼称とした（A1～H6グリッド）。

遺構については、香紫庵遺跡同様検出したものから「S-○○」の遺構番号を付し、報告書作成にあたっては番号の振り直しによる混乱を避けるため調査時の番号をそのまま使用した。遺構の種別に応じた略号については報告書作成段階で付したものである。

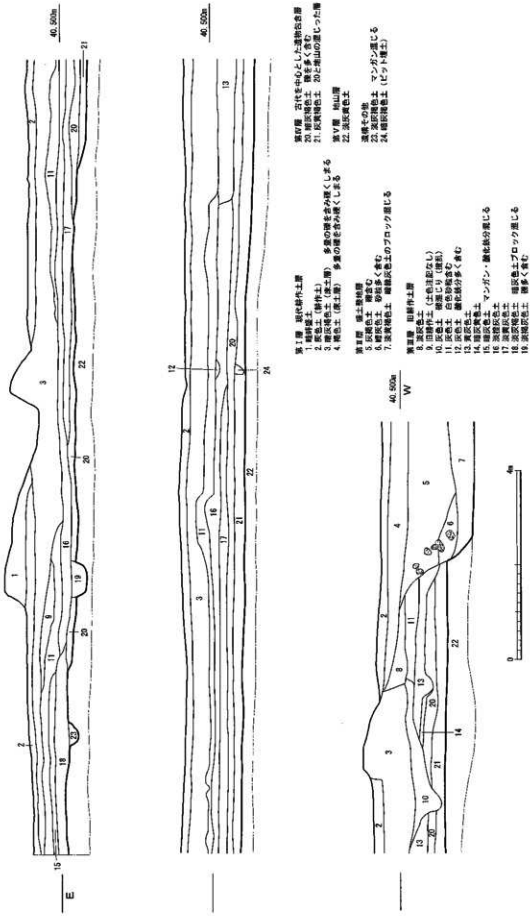
第２節　調査区の基本層序

挟万田遺跡の土層図を第18図に示す。調査区の層序は大きく５層に大別できる。

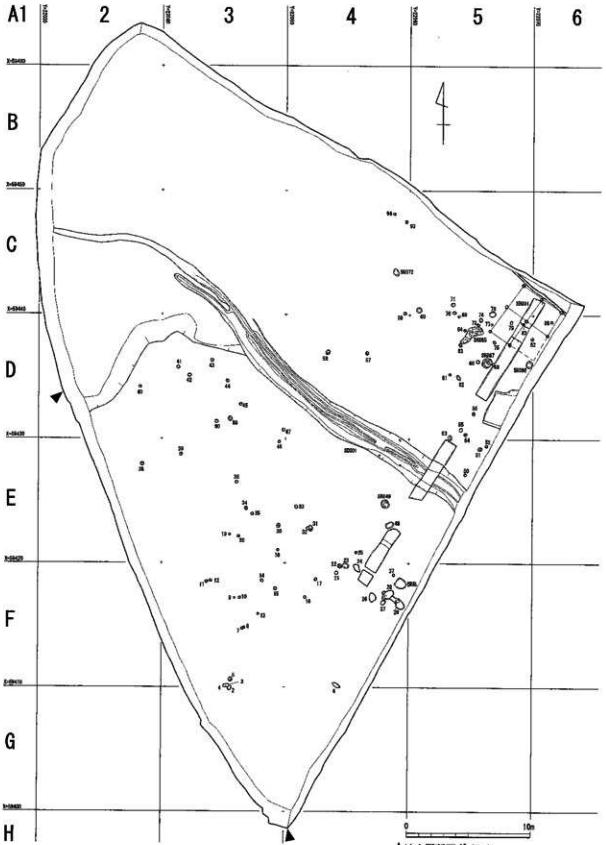
第Ⅰ層は現代の水田に伴う耕作土及び床土層である。

第Ⅱ層は盛土整地層で、遺構配置図では調査区中央に西側への落ち込みラインが認められるが、この落ち込みから西側に認められる土層である。圃場整備時に農地の高さを揃えるために低地に約1.4m余り土を盛ったものと判断される。

第17図　挟万田遺跡位置図(S=1/4,000)



第18図　挟万田遺跡土層断面図



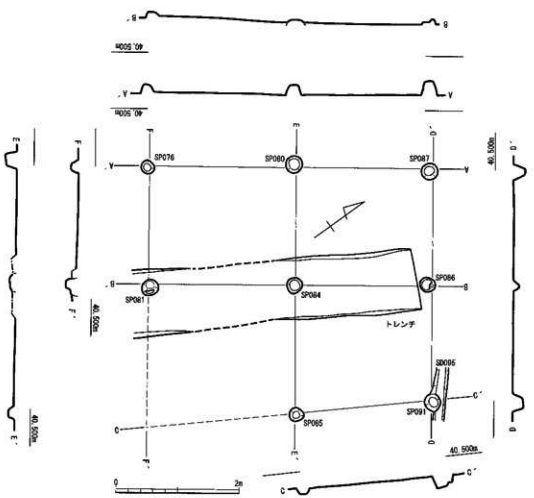
第19図　挟万田遺跡遺構配置図

第3表　挟万田遺跡遺構一覧表(1)

遺構名	遺構種別	グリッド	検出高 (m)	遺構規模(m) 長径	短径	深度	遺構埋土 色調	混入物	備考
SD001	溝	C2～E5	40.285	(39.96)	2.45	0.435	個別図参照		溝3条の重複
SP002	ピット	F3・G3	40.417	0.40	0.28	0.080	灰褐色土		S-003を切る
SP003	ピット	F3	40.392	(0.29)	0.29	0.051	灰褐色土		S-002・004と重複
SP004	ピット	F3	40.389	0.27	(0.23)	0.070	淡褐色土		S-003と重複
SP005	ピット	F3	40.406	0.35	0.31	0.135	灰褐色土		
SK006	土坑	F4	40.642	0.70	0.29	0.064	淡灰褐色土		
SP007	ピット	F3	40.615	0.23	0.21	0.135	黒褐色土		
SP008	ピット	F3	40.630	0.21	0.17	0.116	黒褐色土		
SP009	ピット	F3	40.630	0.17	0.16	0.118	黒褐色土		
SP010	ピット	F3	40.649	0.24	0.20	0.141	黒褐色土		
SP011	ピット	F3	40.613	0.25	0.24	0.181	黒褐色土		
SP012	ピット	F3	40.624	0.23	0.22	0.223	黒褐色土		
SP013	ピット	F3	40.629	0.19	0.18	0.200	黒褐色土		
SP014	ピット	F3	40.632	0.29	0.22	0.176	黒褐色土		
SP015	ピット	F3	40.631	0.28	0.26	0.166	黒褐色土		
SP016	ピット	F4	40.492	0.24	0.21	0.055	黒褐色土		
SP017	ピット	F4	40.498	0.26	0.21	0.027	黒褐色土		
SP018	ピット	E3	40.607	0.21	0.19	0.201	黒褐色土		
SP019	ピット	E3	40.600	0.20	0.18	0.212	黒褐色土		
SP020	ピット	E3	40.597	0.25	0.20	0.232	黒褐色土	炭含む	
SP021	ピット	F4	40.513	0.29	0.29	0.036	黒褐色土		
SP022	ピット	F4	40.505	0.39	0.31	0.052	黒褐色土	炭含む	
SP023	ピット	F4	40.539	0.50	0.42	0.237	黒褐色土	多量の礫含む	
SK024	土坑	F4	40.557	0.79	0.46	0.092	黒褐色土	炭含む	
SP025	ピット	E4	40.496	0.20	0.20	0.048	黒褐色土		
SP026	土坑	F4	40.599	0.78	0.53	0.055	黒灰色土		新しい遺構か
SP027	ピット	F4	40.615	0.44	0.32	0.068	黒灰色土		新しい遺構か
SK028	土坑	F4	40.617	1.10	0.60	0.242	黒灰色土		新しい遺構か
SK029	土坑	F4	40.617	2.17	0.63	0.142	淡灰褐色土		新しい遺構か
SP030	ピット	E3	40.491	0.36	0.29	0.157	黒褐色土		
SP031	ピット	E4	40.472	0.37	0.31	0.208	灰褐色土		S-032と重複
SP032	ピット	E4	40.506	0.55	(0.22)	0.066	黒褐色土		S-031と重複
SP033	ピット	E4	40.434	0.31	0.25	0.139	黒褐色土		
SP034	ピット	E3	40.418	0.29	0.24	0.116	灰褐色土		
SP035	ピット	E3	40.461	0.25	0.24	0.193	灰褐色土		
SP036	ピット	E3	40.381	0.26	0.26	0.247	灰褐色土		
SP037	ピット	F4	40.583	0.23	0.21	0.133	黒褐色土	炭含む	
SP038	ピット	E2	40.214	0.29	0.28	0.147	灰褐色土		
SP039	ピット	E3	40.235	0.26	0.25	0.123	灰褐色土		
SP040	ピット	D2	39.942	0.24	0.22	0.102	淡灰褐色土		
SP041	ピット	D3	40.071	0.27	0.26	0.066	灰褐色土		
SP042	ピット	D3	40.138	0.31	0.26	0.099	灰褐色土		
SP043	ピット	D3	40.115	0.27	0.27	0.160	灰褐色土		
SP044	ピット	D3	40.145	0.28	0.25	0.171	灰褐色土		
SP045	ピット	D3	40.197	0.27	0.24	0.317	灰褐色土		
SP046	ピット	E3	40.240	0.24	0.22	0.161	灰褐色土		
SP047	ピット	D3	40.233	0.26	0.26	0.324	灰褐色土		
SK048	土坑	E4	40.364	0.69	0.45	0.126	淡黄灰色土		新しい遺構か
SK049	土坑	E4	40.271	0.72	0.66	0.253	淡褐灰色土	耕作土に似る	新しい遺構か
SP050	ピット	E5	40.212	0.23	0.21	0.054	灰褐色土		
SP051	ピット	E5	40.342	0.36	0.29	0.190	黒褐色土		
SP052	ピット	E5	40.308	0.22	0.21	0.024	灰褐色土		
SP053	ピット	D5	40.309	0.40	0.33	0.287	黒褐色土		
SP054	ピット	D5	40.365	0.29	0.23	0.230	淡灰褐色土		
SP055	ピット	D5	40.308	0.33	0.25	0.047	淡灰褐色土		
SP056	ピット	D5	40.235	0.31	0.23	0.115	淡灰褐色土		
SP057	ピット	D4	40.051	0.29	0.25	0.022	灰褐色土		石あり
SP058	ピット	D4	40.042	0.41	0.34	0.133	灰褐色土		
SP059	ピット	C4	40.217	0.26	0.25	0.126	灰褐色土		
SP060	ピット	C5	40.244	0.45	0.43	0.229	黒褐色土		
SP061	ピット	D5	40.274	0.20	0.20	0.134	灰褐色土		
SP062	ピット	D5	40.266	0.47	0.25	0.110	灰褐色土		
SP063	ピット	D5	40.251	0.32	0.25	0.121	黒褐色土		
SP064	ピット	D5	40.257	0.20	0.20	0.090	黒褐色土		
SK065	土坑	D5	40.257	2.08	0.74	0.255	暗灰褐色土	砂粒・小礫多く含む	
SP066	ピット	D5	40.256	0.30	0.28	0.110	灰褐色土		
SK067	土坑	D5	40.263	0.84	0.75	0.212	暗灰褐色土	小礫多く含む	
SP068	ピット	D5	40.264	0.28	(0.11)	0.080	黒褐色土		
SP069	ピット	D5	40.242	0.23	0.20	0.172	灰褐色土		
SP070	ピット	C5	40.257	0.30	0.23	0.169	灰褐色土		

第3表　挟万田遺跡遺構一覧表(2)

遺構名	遺構種別	グリッド	検出高	遺構規模(m)			遺構埋土		備考
			(m)	長径	短径	深度	色調	混入物	
SP071	ピット	C5	40.239	0.34	0.29	0.191	灰褐色土		
SK072	土坑	C4	40.050	0.63	0.43	0.167	灰褐色土		
SP073	ピット	D5	40.247	0.25	0.22	0.063	黒褐色土		
SP074	ピット	D5	40.249	0.32	0.28	0.023	黒褐色土		
SP075	ピット	D5	40.248	0.26	0.22	0.092	黒褐色土		
SP076	掘立柱建物	D5	40.246	0.22	0.20	0.149	黒褐色土		
SP077	ピット	D5	40.197	0.21	0.15	0.093	黒褐色土		
SK078	土坑	C5・D5	40.263	0.56	0.44	0.076	灰褐色土		
SP079	ピット	D5	40.252	0.26	0.22	0.119	黒褐色土		
SP080	掘立柱建物	C5	40.253	0.28	0.28	0.180	黒褐色土		
SP081	掘立柱建物	D5	40.145	0.28	0.26	0.097	黒褐色土		
SP082	ピット	D5・D6	40.251	0.26	0.24	0.293	黒褐色土		
SP083	ピット	D5	40.232	0.20	0.17	0.177	黒褐色土		
SP084	掘立柱建物	D5	40.198	0.26	0.26	0.051	黒褐色土		
SP085	掘立柱建物	D6	40.241	0.24	0.22	0.104	黒褐色土		
SP086	掘立柱建物	C6	40.204	0.25	0.24	0.097	黒褐色土		
SP087	掘立柱建物	C5	40.229	0.28	0.27	0.229	黒褐色土		
SP088	ピット	D6	40.226	0.22	0.21	0.182	黒褐色土		
SP089	ピット	D3	40.225	0.38	0.35	0.429	灰褐色土		
SP090	ピット	D3	40.235	0.30	0.26	0.085	灰褐色土		
SP091	掘立柱建物	C6	40.210	0.29	0.26	0.201	黒褐色土		SD095と重複
SK092	土坑	D5	40.267	0.52	0.51	0.188	暗褐色土	小礫含む	
SP093	ピット	C4	40.080	0.26	0.22	0.157	黒褐色土		
SP094	ピット	C4	40.064	0.25	0.20	0.099	黒褐色土		
SD095	溝	C5・C6	40.238	(5.63)	0.27	0.154	黒褐色土		SB001(SP091)と重複



第20図　掘立柱建物SB1実測図

第Ⅲ層は灰色又は暗灰色系の色調を中心とした旧耕作土層である。土色や土質から細かく分層され、長期にわたり水田が営まれたものと判断される。

第Ⅳ層は多量の礫を含む暗灰褐色土と、その下位の灰黄褐色土層で構成される。前者は色調が後述の遺構埋土に類似しており、また第Ⅳ層除去後の遺構検出作業中に古代の遺物が若干出土していることから、これらは古代を中心とした遺物包含層である可能性がある。後者は上層の暗灰褐色土と第Ⅴ層の地山層が混合した土層であろう。

第Ⅴ層は淡灰黄色土の地山層である。

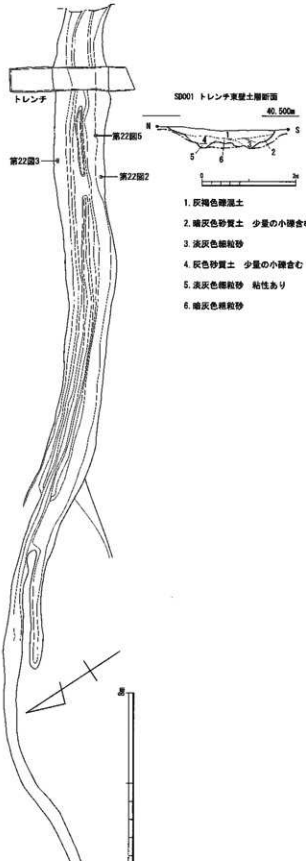
第３節　調査の成果

挟万田遺跡の発掘調査で検出した遺構は掘立柱建物１棟と溝、土坑、多数のピットである。しかし、遺構の多くは出土遺物がなく、帰属時期を明らかにできるものはほとんどない。また、遺構の多くは深さが10～20cm程度のものが多いことから、後世の耕作等によりかなりの削平を受けたものと判断される。

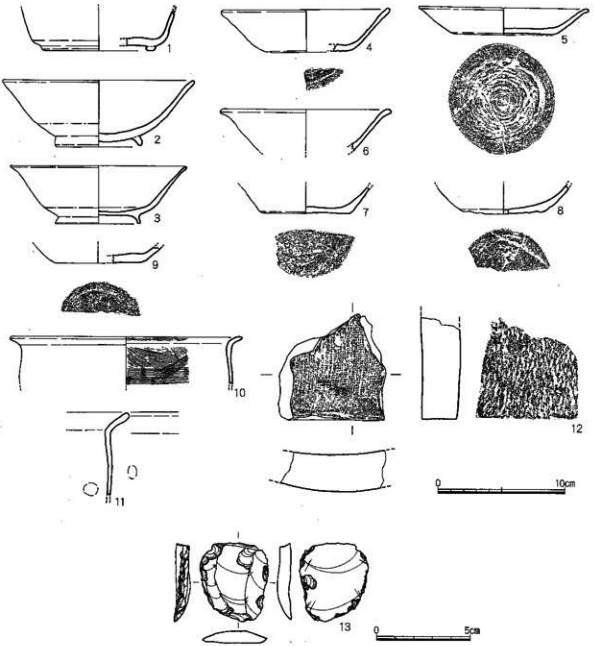
以下、主要なものについて報告する。

SB001（第20図）

調査区の北東隅部で検出した総柱の掘立柱建物である。検出した範囲で東西・南北とも２間の規模であるが、調査区外に続く可能性もある。建物を構成する柱穴はSP076・080・081・084・085・086・087・091である。SP091は細い溝状遺構SD095と重複しているが、その前後関係は明らかにできなかった。柱穴間の距離は南北方向で約2.2～2.3m、東西方向で約1.9mを測るが、SP084とSP085の間は約2.1mと他より長くなっている。いずれの柱穴も規模は小さく、かなりの削平を受けたものと判断される。そのためか、建物の南隅部は何度も検出を行ったが、柱穴を確認できなかった。埋土はいずれも黒褐色土の単層で、SP080・085・087・091から若干の遺物が出土したが、いずれも細片のため遺構の時期を明確に特定できるものは認められない。しかし、遺跡から出土する遺物が古代中心であること、柱穴埋土が後述のSD001や遺構検出面上位の第Ⅳ層と似ていることから、古代の遺構の可能性を考えたい。



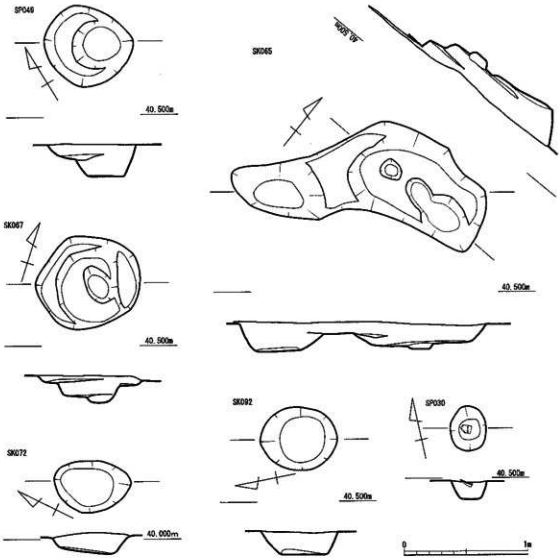
第21図　溝状遺構SD001実測図



第22図　溝状遺構SD001出土遺物実測図

SD001（第21図）

調査区の中央で検出した溝状遺構である。調査区の東西を横断するようにはしっており、調査区西側への旧地形の落ち込みに沿うように若干カーブしている。両端が調査区外に続くために全長は明らかにできないが、直線距離にして40m以上の規模である。調査区の東側では複数の溝が重複したような状態が確認され、土層断面でもそのような状態を追認できた。最下層は暗灰色の粗粒砂層で、最初に構築された溝の埋土である。この層を切って両側に掘られた溝の埋土が２～５層で、それぞれ上下２層に分層される。両方の溝とも埋土には共通性があり、上層は砂質土層、下層は細粒砂層である。砂質土や砂層であることから、水流による堆積の可能性が考えられる。最上層は灰褐色の礫混土層で、当該層中から完形の黒色土器や残りの良い土師器椀・坏等が出土している。南北両側の溝の前後関係については明らかにできなかった。一方で、西側部分では埋土に耕作土が混じっており、新しい時期の遺構である可能性も残されたが、完形の古代土器が出土していることから遺構の時期は９世紀代で、以来同一場所において比較的長期間にわたって遺構が繰り返し構築されたものと考えたい。



第23図　その他の遺構実測図

SD001出土遺物（第22図）

1は須恵器の高台付の坏である。2は完形の黒色土器椀で、内黒のA類に該当する。磨滅のため内面のヘラミガキは明瞭ではない。口径15.2cm、高台径6.9cm、器高5.1cmを測る。3は高台付きの土師器椀で、内面には黒斑が認められる。口縁部は外反するものであるが、8は底部からの立ち上がりは内湾気味である。底面にはヘラ切り離し痕が認められ、特に5の痕跡は明瞭である。5は器高が2.1cmと低く、皿状を呈する。10・11は土師器の甕で、10は口径18.4cmを測り、内面は横位のハケ調整を密に施す。12は平瓦で、凸面に縄目タタキ、凹面には布目痕が残る。古代瓦の破片である。13は姫島産黒曜石の二次加工剥片で、腹面及び背面ともに細かい剥離痕が認められる。長さ4.2cm、幅3.6cm、重量12.2gを測る。

その他の遺構（第23図）

SK049

E4グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長辺0.72m、短辺0.66m、深さ0.25mを測る。遺構内部は西側にテラス状の段が付き、東側が一段深くなっている。埋土は淡褐灰色土で、第Ⅲ層の耕作土層に似ていることから新しい時期の遺構である可能性が高い。遺物は出土しなかった。

SK065

D5グリッドで検出した土坑である。長辺2.08m、短辺0.74m、深さ0.26mを測る不整形の土坑で、内部は中央が一段高く、両端は深く掘り込まれる。埋土は暗灰褐色土で、砂粒・小礫を多く含む。若干の遺物が出土したが、いずれも細片で時期が特定できるものは出土していない。

SK067

D5グリッドで検出した土坑である。平面円形状を呈し、長辺0.84m、短辺0.75m、深さ0.21mを測る。内部は両サイドにテラス状の段が付き、東よりに柱穴状の掘り込みが認められる。埋土は暗灰褐色土で、小礫を多く含む。若干の遺物が出土したが、いずれも細片で時期が特定できるものはない。

SK072

C4グリッドで検出した土坑である。平面楕円形状を呈し、長辺0.63m、短辺0.43m、深さ0.17mを測る。埋土は灰褐色土の単層である。遺物は出土していない。

SK092

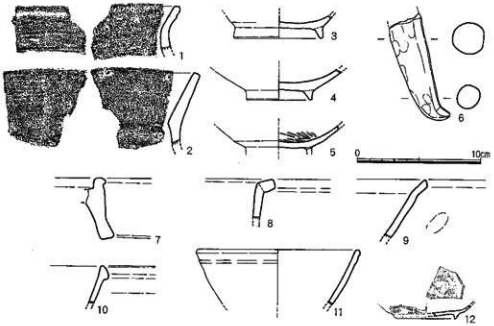
D5グリッドで検出した土坑である。平面形状は円形を呈し、長辺0.52m、短辺0.51m、深さ0.19mを測る。埋土は小礫を含む暗褐色土で、内部から若干の遺物が出土したが、いずれも細片で時期が特定できるものはない。

SP030

E3グリッドで検出したピットである。平面形状は円形を呈し、長辺0.36m、短辺0.29m、深さ0.16mを測る。埋土は黒褐色土の単層である。検出面で土器が出土したが、細片のため図示できなかった。

調査区出土遺物（第24図）

1・2は縄文土器である。1は頸部から口縁が短く延びる深鉢で、外面に1条の沈線を施す。後期の鐘崎式である。2は頸部で屈曲し口縁が外に開く深鉢である。外面には条痕を施し、内面の屈曲部には明瞭な稜を持つ。晩期に位置付けられよう。3・4は高台付きの土師器椀である。5は黒色土器椀で、内黒のA類椀に該当する。



第24図　調査区出土遺物実測図

底部はヘラケズリの後に高台を貼り付けるが、高台は欠損している。内面にはヘラミガキを密に施す。6は土師器鍋の脚部である。全体にナデ及び指頭の押圧による整形が行われている。断面形状は円形である。7は土師器の鍋で、口縁は短く外に折れる。8は瓦質土器の鍋である。外に開く器形で、口縁は緩く外反する。9は焼締陶器の甕で、外反する口縁部を折り返して作出した縁帯部の破片である。器形から常滑窯の製品であり、縁帯部の長さが5.2cmを測り、かつ縁帯部と頸部との接着が認められないことから、中野編年の8型式、14世紀後半に位置付けられよう[註6]。10・11は白磁碗で、10はいわゆる玉縁碗である。11は口径13.6cmを測る。いずれも中国産で、中世の所産である。12は中国景徳鎮窯系の青花皿で、外面及び内面の見込み圏線内に染付の文様を施す。

以上のうち、2～4・7・9～12は表土掘削時、1・5・6・8は遺構検出時の出土である。

第4節　小結

挟万田遺跡の発掘調査の結果、確認されたのは溝状遺構SD001と総柱の掘立柱建物SB001、若干の土坑、ピット多数である。しかし全体的に削平を受けているためか、遺構の残り具合は悪く、遺構の時期の特定が困難なものがほとんどであった。

SB001は遺構埋土の特徴から古代の可能性が考えられる。また、SD001からは古代の須恵器や土師器、黒色土器A類椀、古代瓦等が出土しており、中でも黒色土器椀は完形品である。遺物の出土状態からこの溝も古代の遺構と考えられるが、一部で埋土に耕作土に似た土が混じる箇所も認められた。

第25図は圃場整備前の地形図に挟万田遺跡の調査区をおとしたものである。これを見ると、SD001の西側部がちょうど畝境にあたっていることが分かる。従って、土地の境界に掘られた溝であったことが分かる。この土地区画がいつまで遡るのかは明らかではないが、少なくとも古代頃にはすでに開削され、機能していたものと判断される。土層断面図でも数度の掘り返しが認められ、繰り返し使用された状況が窺える。つまり、古代以降の土地区割りが現代まで継続していた事例であるといえる。

この挟万田遺跡の周辺でも丹念に試掘調査を実施したが、遺構は全く確認できなかった。後世の耕作や圃場整備により削平された可能性もあるが、香柴庵遺跡同様、集落規模としては小規模なものであった可能性が高い。古代瓦の出土から、塔ノ熊廃寺との関係にも留意されるが、その解明は今後に期したい。

また、白磁や青花といった貿易陶磁器の出土から、中世期の遺跡の存在も予想される。付近には秣城跡も位置していることから、在地土豪の秣氏と関係した集落や居館等の遺跡があった可能性があり、今後注意が必要であろう。

第25図　圃場整備前の地形と挟万田遺跡(小林 1986、前掲註3に加筆)

註6) 中野晴久 1995「9. 中世陶器　(2) 常滑・瀬戸」『概説　中世の土器・陶磁器』　真陽社

第4表　遺物観察表

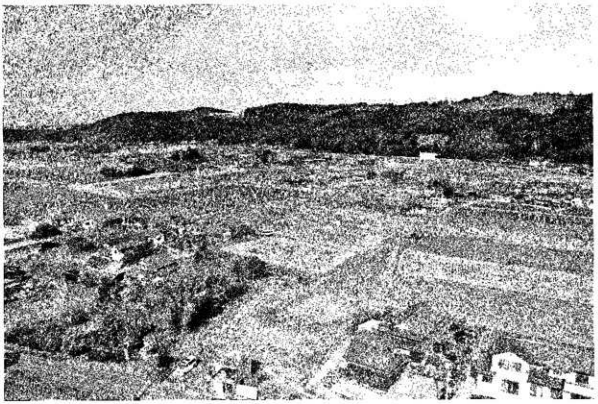
挿図番号		器種		出土地点・層位	口径・底径等 (cm)		器高 (cm)	調整・施文		焼成	色調		備考
第22図	1	須恵器	高台付坏	SD001	高台径	(8.8)	(3.1)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	明灰色	
	2	黒色土器	椀	SD001	口径 高台径	15.2 6.8	5.1	外面 ヨコナデ、回転ヘラケズリ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	淡褐色 淡黒色	完形品、A類椀
	3	土師器	高台付椀	SD001	口径 高台径	14.0 6.8	4.6	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	淡褐色	
	4	土師器	坏	SD001	口径	(13.4)	3.3	外面 ヨコナデ 内面 磨滅により不明		良好	外面 内面	淡褐色	底面にヘラ切り離し痕
	5	土師器	坏	SD001	口径 底径	13.4 8.0	2.1	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	黄橙褐色	底面にヘラ切り離し痕
	6	土師器	坏	SD001	口径	(13.6)	3.3	外面 ヨコナデ 内面 磨滅により不明		良好	外面 内面	橙褐色	
	7	土師器	坏	SD001	底径	(7.2)	2.1	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	淡褐色	底面にヘラ切り離し痕
	8	土師器	坏	SD001	底径	(7.2)	(2.2)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	淡褐色	底面にヘラ切り離し痕
	9	土師器	坏	SD001	底径	(6.8)	(1.3)	外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	灰白褐色	底面にヘラ切り離し痕
	10	土師器	甕	SD001	口径	(18.4)	(3.8)	外面 ナデ 内面 ナデ、ヨコハケ		良好	外面 内面	淡褐色	内面に黒斑あり
	11	土師器	甕	SD001			(6.6)	外面 ヨコナデ、ナデ 内面 ヨコナデ、ナデ		良好	外面 内面	淡褐色	
	12	瓦	平瓦	SD001	長さ 幅 厚さ	(8.5) (8.3) 3.0		凸面 縄目タタキ 凹面 布目痕		良好	凸面 凹面	淡褐色 淡灰褐色	古代瓦 凹面に黒斑あり
	13	打製石器	二次加工剥片	SD001	長さ 幅 厚さ	4.2 3.8 0.7		腹面・背面ともに剥片の左右両側辺に二次加工					姫島産黒曜石製 重量12.2g
第24図	1	縄文土器	深鉢	遺構検出時				外面 条痕、口縁下に沈線 内面 ナデ		良好	外面 内面	黄褐色 灰褐色	後期縄崎式
	2	縄文土器	深鉢	表土				外面 条痕→ナデ 内面 ナデ		良好	外面 内面	灰褐色 淡褐色	
	3	土師器	高台付椀	表土	高台径	7.8	(2.0)	外面 ナデ 内面 ナデ		良好	外面 内面	淡褐色	
	4	土師器	高台付椀	表土	高台径	5.6	(2.6)	外面 ナデ 内面 ナデ		良好	外面 内面	白黄色	
	5	黒色土器	椀	遺構検出時	高台径	5.8	(2.0)	外面 回転ヘラケズリ、ナデ 内面 ヘラミガキ		良好	外面 内面	白黄色 淡黒色	A類椀
	6	土師器	鍋(脚部)	遺構検出時	長さ	(9.3)		外面 ナデ、指頭圧痕		良好	外面	淡橙色	
	7	須恵陶器	壺	表土				外面 ヨコナデ 内面 ヨコナデ		良好	外面 内面	灰褐色	常滑 自然釉付着
	8	土師器	鍋	遺構検出時				外面 ナデ 内面 ナデ		良好	外面 内面	白橙色	
	9	瓦質土器	鍋	表土				外面 ナデ、指頭圧痕 内面 ナデ		良好	外面 内面	黄橙褐色	
	10	白磁	碗	表土				外面 ヨコナデ、下半部は露胎 内面 ヨコナデ、施釉		良好	外面 内面	乳白色	玉縁碗
	11	白磁	碗	表土	口径	(13.6)	(4.7)	外面 ヨコナデ、施釉 内面 ヨコナデ、施釉		良好	外面 内面	乳白色	
	12	青花	皿	表土	高台径	(4.7)	(1.0)	外面 施釉、染付文様 内面 施釉、染付文様		良好	外面 内面	乳白色	

第5章　総括

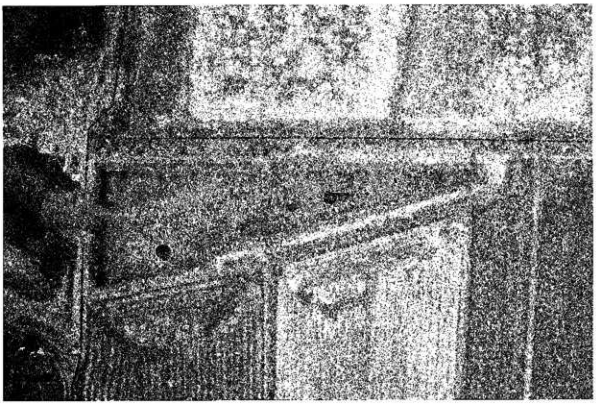
以上報告してきたように、香紫庵遺跡、挾万田遺跡では古代を中心とした遺構を確認することができた。特に香紫庵遺跡では古代寺院塔ノ熊廃寺と同時期の土坑や掘立柱建物が確認され、寺院と関係する集落であった可能性が高い。SK001からまとまって出土した製塩土器も特筆すべきものである。両遺跡とも、古代寺院と集落の関係の解明は今後の調査研究に委ねられるが、そのための基礎資料を提示できたことは大きな成果であったといえる。

また、香紫庵遺跡、挾万田遺跡ともに縄文時代、中世の遺物も出土している。特に香紫庵遺跡では縄文時代の大型土坑が検出され、挾万田遺跡でも縄文土器や石器が出土している。縄文時代についてはキャンプサイト的な利用であった可能性が高いが、両遺跡周辺の段丘上での活動の開始が後期以降であったと考えられる。

中世では挾万田遺跡からは白磁や青花皿といった貿易陶磁器が出土しており、周辺に中世の集落や居館等の遺跡がある可能性もあり、注意を要する。



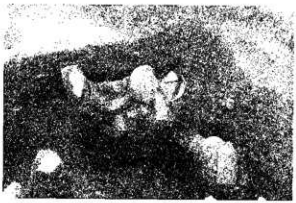
香紫庵遺跡から挟万田遺跡を望む



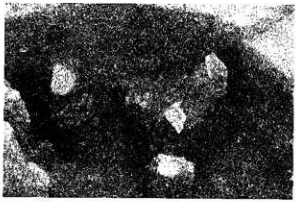
香紫庵遺跡　調査区全景写真

調査区北半部遺構群（SK001、掘立柱建物SB001）

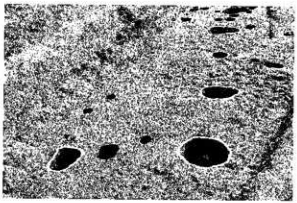
SK001遺物出土状況



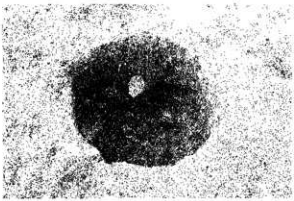
SK001遺物出土状況



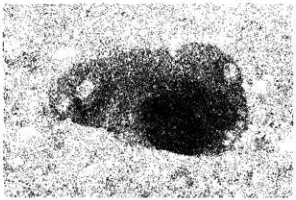
SK001遺物出土状況



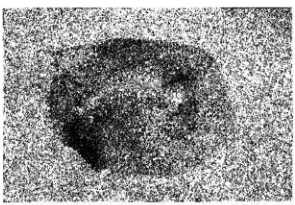
掘立柱建物SB001



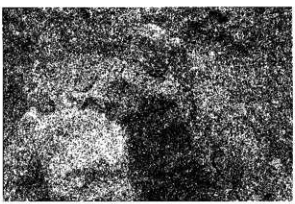
SB001 柱穴（SP035）



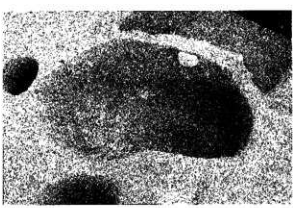
SB001 柱穴（SP040）



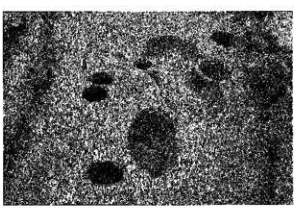
縄文時代の土坑 SK030



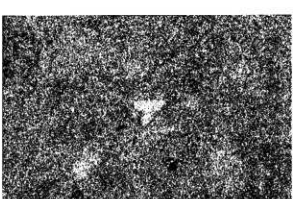
SK030 縄文土器出土状況



土坑 SK036



土坑 SK047・SK050



E2グリッド　石器出土状況

調査区土層断面

第6図1

第6図2

SK030 出土遺物

第8図1

第8図6

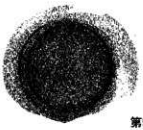
第8図7

第8図8(外)

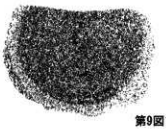
第8図8(内)

第9図11

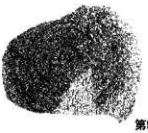
第9図12



第9図14



第9図16



第9図18

第9図22

第9図24

SK001 出土遺物

第10図29

第10図30

第10図34

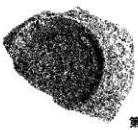
SK001 出土遺物

第12図1

第12図2

第12図3

SB001 出土遺物



第14図1

第14図2

第15図1

SP037 出土遺物

第15図2

第15図4

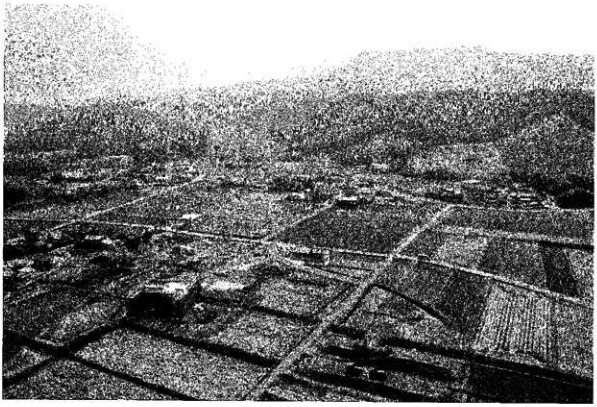
第15図6

第15図10

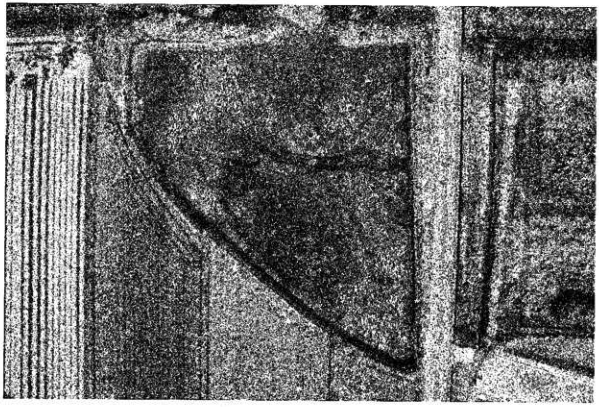
第16図1(外)

第16図1(内)

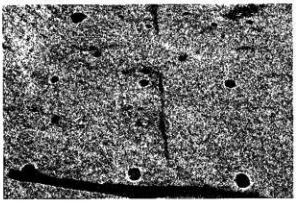
調査区出土遺物



挾万田遺跡から香紫庵遺跡・八面山を望む



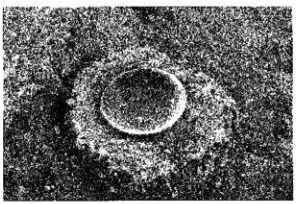
挾万田遺跡　調査区全景写真



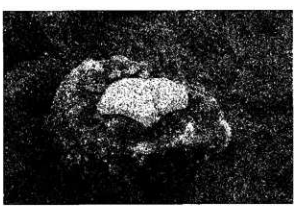
掘立柱建物 SB001

溝状遺構 SD001

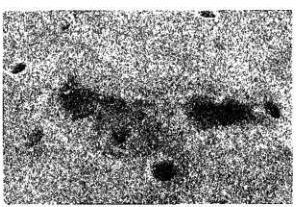
SD001 土師器椀出土状況



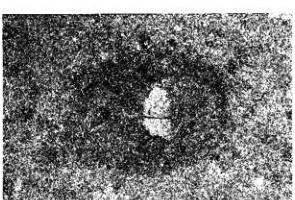
SD001 黒色土器出土状況



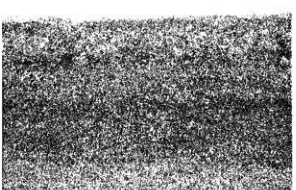
SD001 土師器坏出土状況



土坑 SK065



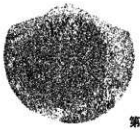
SP030 遺物出土状況



調査区土層断面

第22図2

第22図3



第22図5

第22図12(凹面)

第22図12(凸面)

第22図10

第22図13

第24図1

SD001 出土遺物

第24図2

第24図3

第24図4

第24図6

第24図11

第24図12

調査区出土遺物

報告書抄録

ふりがな	こうしあんいせき・はさまだいせき
書名	香紫庵遺跡・挟万田遺跡
副書名	国道212号(中津三光道路)道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	2
シリーズ名	大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書
シリーズ番号	第68集
編著者名	横澤 悠
編集機関	大分県教育庁埋蔵文化財センター
所在地	〒870-1113 大分市大字中判田字ビワノ門1977番地　TEL 097-597-5675
発行年月日	西暦 2013年 3月 29日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
こうしあんいせき 香紫庵遺跡	なかつしさんこうにしまぐさあざなからもと 中津市三光西秣字植本	44203	203182	33° 31′ 57″	131° 14′ 18″	2012.1.6 ～ 2012.2.3	437㎡	国道212号(中津三光道路)道路改良工事
はさまだいせき 挟万田遺跡	なかつしさんこうしもまぐさあざはさまだ 中津市三光下秣字挟万田	44203	203287	33° 32′ 7″	131° 14′ 14″	2012.1.10 ～ 2012.2.3	1520㎡	国道212号(中津三光道路)道路改良工事

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
香紫庵遺跡	集落	縄文時代晩期 古代	土坑 掘立柱建物、土坑、ピット	縄文土器、石器、土師器、須恵器、黒色土器、製塩土器、瓦質土器、近世陶磁器、石臼	古代寺院塔ノ熊廃寺と関係する集落の発見
挟万田遺跡	集落	古代	掘立柱建物、土坑、溝、ピット	縄文土器、石器、土師器、須恵器、黒色土器、古代瓦、陶器(常滑)、白磁、青花	

要約

国道212号(中津三光道路)道路改良工事に伴い、中津市三光に所在する香紫庵遺跡と挟万田遺跡の発掘調査を実施した。

発掘調査の結果、香紫庵遺跡では縄文時代晩期の土坑1基、古代の掘立柱建物や大型土坑、多数のピット等、挟万田遺跡では古代と考えられる溝状遺構や掘立柱建物、多数のピットを検出した。

香紫庵遺跡の土坑SK001や掘立柱建物SB001は8世紀後半と考えられ、年代が古代寺院塔ノ熊廃寺の創建時期と合致することから、塔ノ熊廃寺と関係する集落であった可能性が高い。また、SK001からは土師器・須恵器とともに多量の製塩土器が出土していることも特筆される。

挟万田遺跡からも古代瓦が出土しており、塔ノ熊廃寺との関係が注意される。

香紫庵遺跡
挾万田遺跡

一国道212号（中津三光道路）道路改良工事に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書（2）一

大分県教育庁埋蔵文化財センター調査報告書　第68集

平成25（2013）年3月29日

編集・発行　大分県教育庁埋蔵文化財センター
〒870-1113
大分市大字中判田字ビワノ門1977番地
TEL　097-597-5675

印　　刷　外堀印刷有限会社
〒870-0025
大分市顕徳町1丁目10番21号
TEL　097-536-2666